

特100  
314

新譯國文叢書  
保元物語  
平治物語  
須田文士編



始



特100  
314

目録の刊發

新譯國文叢書の發刊に就て

梗概叢書の發行は出版界近時の流行なり。されど、その多くは泰西文學の翻譯にして、中には必ずしも、不健全なる思想を鼓吹せるものなしとはいふべからず。且夫れ物には次第あり。泰西文學の一端をも窺はんとするものは、必ずまづ我が古文學を知らざるべからず。我が古文學の何たるをも解せずして泰西文學を味はんとす、こゝに於てか徒らに新を求め奇を趁ひ、はやくも本を忘れて末に趨り、往々危険なる思想にかぶるゝものさへあるを致せり。

是れ職として我古文學の書が、多くは難澁にして、解し易からず、一般人士をして、自ら古文學書に遠ざからしむるに至れるが故なり。余茲に鑑る所あり、我が古文學の萃を抜き、斯道の大家に囑し、之が梗概を記し、或は語を逐うて口語に譯し、以て新譯國文叢書を

大正  
3.12.1  
内交

成し、一般人士の讀誦に供し、一は以て國民性の涵養に資し、一は以て清き娛樂の資たらしめんとす。

江湖諸彦乞ふ幸に余か微衷を諒せられんことを。

大正三年九月

發行者 石黒專之助白す

### 新譯國文叢書序

國語教育といふことを以て、單に語法の教授と思つて居る人があ  
る。其の淺見はいふまでも無い。國語教育は即ち國文の教育である。  
國文教育を以て、單に國文學の解釋に限ると思つて居る人がある。  
これも亦一を知つて二を知らぬと言はねばならぬ。國語教育、國文  
教育の本旨は、古來日本人の作り出した一切のもの、換言すれば、  
我等祖先の精神作用すべての心性的作物、繪畫なり、彫刻なり、音  
樂なり、建築なり、文學なり、あらゆるものゝ趣味を理解せしめ、  
融合せしめるのに在るので、要するに、日本人といふものを造り上  
げるのが其の目的であるのである。就中國文學は言語にあらはれて、  
祖先の思想感情を暴露したるもの故、國民の精神を理解するには最も  
手掛りの早いもの、最も適切なもの、最も都合のよいものである。

これ國語教育、國文教育が最も重んぜられる所以であるのである。  
こゝに一つの困難は、繪畫、彫刻、建築等とは事かはつて、國語は絶えず變遷を受けるが爲に、古い時代の國文は後世の人が了解出來ぬやうになることである。古來の佛畫も、音樂も、今の人の目にも、耳にも分るが、古文學はもはや今の人には變らぬといふことである。これは文學の人心に適切なだけそれだけ、亦不便な點であつて、いはゆる國語教育、國文教育の困難は、そこに存在するのである。

( 2 )

以上の如き事を考へると同時に、古文學即ち我等の祖先の思想感情を直接に言ひあらはした國文學が、今の一般國民の、何人にも理解せられるやうな言語で世に行はれることは、最も望ましいことである。學校以外に於て、國語國文教育の擴張せられることは非常であるといはねばならぬ。今回の本叢書の發行が此の目的に合したることと、

我が國文學卒業の學士諸君が此の事業を企てられたことに關しては、余は中心の欣喜に堪へぬのである。

大正三年九月廿六日

芳賀矢一しるす。

( 3 )

## 解題

保元物語・平治物語共に我國軍記物語の嚆矢で、保元物語は、後白河天皇の御即位に筆を起し、爲朝の最期で終つて居る。平治物語は、保元物語の後を受けて、信賴・信西の軋轢より、都の兵亂となり、源氏の衰運に傾くのを、最後に頼朝・義經が兵をあげ、源氏の勢力を挽回することに筆を收めてある。兩書共に、文體質實、所論公平にして、古言・漢語との調和よく、後世の軍記物語程に、修飾語は多くない。動もすれば、史實の正確を缺くものなきにあらねど、勇壯なる物語は、懦夫をも立たしむべく、悲哀な事件には、勇士と雖も涙を惜む譯にはゆかぬ。分量に於ては、兩者共、略々同じ位で、同一人の筆であらうと、古來云ひ傳へられて居るが、作者はわからぬ。或は葉室大納言時長の作といひ、或は、多武の峰の公こうの諭僧正の筆であるともいはれて、結局わからぬ事になつて居る。しかし、何となく源氏の肩をもつて居ることや、保元物語

に、西行が白峰へ詣でた事、平治物語に、頼朝の死んだこと、などの載つて居る所を見ると、頼朝の死より、北條氏の勢力に移らぬ間、殊に、頼朝の死後、間もない時に、葉室家あたりの誰れかによつて書かれたと思つたなら、大差なからう。兩書の文體・用語共に酷似して居るから、同一人の作であらうけれど、滑稽な分子が平治物語に著しいことは、注意すべき事柄である。保元・平治共に數本あるけれど、水戸藩で校合した、参考保元平治物語が最もよい。又新しい註釋も、少しあるけれど、三木五百枝氏の保元物語講義と、今泉定介氏の平治物語講義とが、最も詳しい様である。其他、云ふべき事も少くないが、繁雜を避けるために、略すことにする。

保元物語目次

一、後白河院御即位……………一

二、鳥羽法皇熊野御參詣並に御託宣の話……………三

三、鳥羽法皇崩御……………四

四、新院御謀叛思召し立つ……………五

五、官軍方々手分け……………九

六、親治等生捕らる……………一〇

七、新院御謀叛露見並に調伏、内府の異見……………一〇

八、新院爲義を召さる鵜の丸の由來……………一二

九、左大臣殿上洛並に到着……………一四

一〇、官軍召集めらる……………一五

一一、新院御所各門々固め及び軍評定……………一五

一二、將軍塚鳴動、附、彗星出づ……………二七  
 一三、主上三條殿行幸及び官軍勢ぞろへ……………二七  
 一四、義朝白河殿を夜討す……………一九  
 一五、白河殿を攻め落す……………二二  
 一六、新院左府御没落……………二四  
 一七、新院御出家……………二四  
 一八、朝敵の宿所を焼拂ふ……………二五  
 一九、關白殿本官に歸復し、武士に勸賞を行はる……………二六  
 二〇、左府薨逝並に大相國忠實の歎き……………二七  
 二一、重成勅を奉じて新院を守護し奉る……………二九  
 二二、謀叛人各召捕らる……………三〇  
 二三、重仁親王御出家……………三〇  
 二四、爲義降參す……………三一

二五、謀叛人誅せらる……………三三  
 二六、爲義の最期……………三四  
 二七、義朝の弟誅せらる……………三九  
 二八、義朝幼少の弟悉く失はる……………四〇  
 二九、爲義の北の方入水……………四七  
 三〇、左府の死骸實檢……………五〇  
 三一、新院御遷幸並に重仁親土の御事……………五一  
 三二、無鹽君……………五三  
 三三、左府の公達及び謀叛人各遠流……………五四  
 三四、大相國上洛……………五五  
 三五、新院御經沈め並に崩御……………五六  
 三六、爲朝生捕り遠流の話……………五八  
 三七、爲朝鬼が島わたり並に其最期……………六〇

平治物語目次

一、信頼と信西と不快……………六三

二、信頼信西を滅さんと議す……………六五

三、三條殿發向並に信西の宿所を焼拂ふ……………六七

四、信西が子息關官、附、除目、並に照源太の上洛……………六八

五、信西出家の由來、並に南都落ち、其最期……………七〇

六、信西が首實檢、大路をわたし、獄門にかく……………七一

七、唐僧來朝の話……………七一

八、叡山物語……………七二

九、六波羅より紀州に早馬を立つ……………七三

一〇、光頼卿參内、附許由が事、清盛熊野より上洛す……………七四

一一、信西が千息遠流に宥めらる……………七六

一二、後白河院仁和寺に行幸……………七八

一三、主上六波羅に行幸……………八〇

一四、源氏勢揃へ……………八一

一五、待賢門の軍、信頼落つ……………八三

一六、義朝六波羅に寄す、並に頼政の心變り……………八八

一七、六波羅合戦……………八九

一八、義朝敗北す……………九〇

一九、信頼降參す、並に其最期……………九三

二〇、官軍除目を行はれ謀叛人刑罰に行はる……………九四

二一、常警註進及び信西が子息の遠流……………九五

二二、義朝青墓に落ち著く……………九六

二三、義朝間野へ下向し、忠致心替りす……………九七

二四、頼朝青墓に下着す……………九八



二五、金丸尾張より馳せ上る……………九  
 二六、長田義朝を殺し六波羅に馳せ参り義朝の首かけらる……………一〇〇  
 二七、忠致尾州に逃げ下る……………一〇一  
 二八、悪源太誅せらる……………一〇一  
 二九、清盛の出家と瀧詣で並に悪源太雷となる……………一〇四  
 三〇、頼朝の生捕と常磐落つる話……………一〇四  
 三一、頼朝遠流に宥めらる、吳越の戦ひ……………一〇七  
 三二、常磐六波羅に出づ……………一〇九  
 三三、經宗惟方遠流の後召し返さる……………一一一  
 三四、頼朝の遠流と盛安の夢合せ……………一一三  
 三五、牛若奥州下向……………一二四  
 三六、頼朝義兵を擧げて平家を討つ……………一二六

(目次終)

新 保元物語

文學士 須田 正雄 編

卷 一

後白河院御即位 鳥羽法皇と申すは人皇七十四代の帝、堀川天皇第一の皇子、御母は贈皇太后宮藤の茨子、大納言實季卿の女である。康和五年正月十六日御誕生、同年八月十七日立太子、御齡五歳の時、父帝崩御と共に、嘉承二年七月十九日御踐祚。在位十六年間、天下平穩無事であつたが、保安四年正月二十八日、御歳二十一歳にして、第一の皇子崇徳院に御讓位になつた。大治四年七月七日、白河院崩御の後、鳥羽院政治を行はせられ、賞罰極めて公平であつて、國は富み民は其堵に安んずる有様。保延五年五月美福門院の御腹に、皇子御誕生あり、上皇は非常なる御喜びで、やがて此皇子を東宮に御立てになつ

た、此方は御歳三歳で、永治元年十二月二十七日御即位になつたから、崇徳院をば新院と申し奉つた。別に御病氣でもないのに心ならずも御讓位になつた。は畢竟鳥羽院の御所存からで、従つて父子兩院の御中、よろしからずなどいふ噂もあつた。崇徳院は再び御即位になるか、或は第一の皇子重仁親王を位に即けやうかなと思召したらしい。永治元年七月十日には、鳥羽の院は御年三十九玉體恙もあらせられぬに、御剃髮遊ばされた。但し別に理由あるではなく、眞情から佛道に入らうといふ御考なのである。然るに此年御即位になつた近衛の院には、久壽二年夏より御惱にかゝらせられ、七月下旬には、早御重態に陥らせられた。心細く思召されたのであらう、御製に、

蟲の音の弱るのみかは過ぐる秋を惜む我身ぞまづ消えぬべき。

と遊ばして、七月二十三日、御年十七歳にして終に御崩れになつた。法皇女院の御歎きは申すも中々愚かである。新院は此度こそ、自分は位に即かずとも、重仁親王は必ず位に即ける事が出来ようと御思ひになり、世の人も皆然ること

と思つた。然るに、美福門院の御計らひで、第四の宮の後白河院が御即位と云ふ事になつたので、朝野共に事の意外に驚いた。此宮も新院と同じく、故待賢門院の御腹故、門院に對しては等しく御繼子乍ら、門院は重仁親王の御即位あらんを猜み奉り、此宮を内々法皇に申し進め參らせたからである。蓋し近衛院の御早世は、新院が呪ひ遊ばしたためといふ門院の誤解から起つたことで、此爲め新院の御恨も一しほ増したのである。

鳥羽の院熊野御參詣、並、御託宣

さて、久壽二年の冬頃、鳥羽法皇は熊野へ御參詣なされた。本宮證誠殿の前で御祈念の際、寶殿より一人の童子が手を出して打返ししする。法皇は御驚きになり御供の人々を召し、山中無雙の巫をして此不思議を占はせられたが、中々神下りがしない。外に山伏八十餘人般若妙典を讀誦し祈願することや久しく、巫も肝膽を碎いて祈請する。漸く神下りがしたのであらう、種々な神變のあつた後、巫は法皇に向ひ、右手を擧げて打返ししする。法皇は即ち神意のあらはれしことと思召し御座を退き、

「それはどう云ふ意味であらう」と御問ひになると、「明年の秋頃必ず御崩れになる。すると、其後世の中は、手の裏をかへす様に變つて仕舞ふといふ神意である」と申上げた處が、法皇を始め、御供の人々も涙を流して、「どんなにかして御延命の法はないものか」と神靈に問へども、「定まつた運命は致方ないものだ」と云つて去つてしまつた。居合せた貴賤上下皆頭を地にして拜み奉つた。法皇は如何に御心細く思召した事であらう。從來の御參詣には、天長地久にして、切目王子（熊野街道九十九王子の一）の柵の葉を百千度もかざさうと思召したのに、今度は三つの山への御奉幣も、これが最後かと心細く、眞言妙典御法樂の際にも、「臨終 正念往 生極樂」と臨終崩後の御祈念をあそばされたのである。還御の御様子も誠に御いたましい有様であつた。

鳥羽の院崩御 かくて今年に暮れた。翌年四月二十七日、年號は保元と改まつたが、法皇は此頃から御不例である。世の人は、去年の秋、近衛院が先だち遊ばした御歎きの積もつた爲めであらうと、専ら取沙汰したけれど、矢張定

めの病に御かゝりになつたのである。日にまし重く、月毎に望少く、わたらせられるので、美福門院は六月十二日、鳥羽の成菩提院で御落飾になつた。先きには近衛院御崩れになり、今また御契深き法皇も御惱重く、打つとく御歎きの餘り、かくは思召されたので、誠に悲しいことである。法皇は神意に基く御惱みとあつて、御祈も御療治も遊ばさず、七月二日終に御崩れになつた。御年五十四。有爲無常生者必滅の習は、今始めて驚くべきにもあらねど、さすがに天地晦暗、日月も光を失ひし如く、萬民の哀悼父母の喪に於けるよりも甚しい。釋迦如來が生者必滅の理を沙羅双樹の下に教へし時は、人天共に悲しみ、二月十五日入滅の際には、生物五十二類色を失ひ、此度七月二日の崩御には、帝都の内外悲しまざるなく、心なき草木さへも憂へ顔である。されば年來召使はれし人々、まして女院の御歎は申すもおろかな次第で、嘗ては金臺の上に玉體と御雙び遊ばしに今や燈下に御向ひ申す影もなく、枕邊には昔を忍ぶ涙のみ積り夜の御召しは人無き床に残つて、御心をやぶる種となり、院の御面影は身に

つきそうて、御忘れ申すことは出来ぬ。生者必滅の理は、貴賤貧富の別によりて、異りざるは勿論ながら、去年の御歎き、今年の御悲みと、かうも重るほどうしたものと、思召すも無理ならぬことである。

〔新院御謀叛思召立つ〕 かゝる折柄、新院の御心中おだやかでない世の人は私語き合つた。上皇の御所も宮中も混雑の際、新院の方の武士共が東三條に立籠つて居て、或は山に登り、或は木に攀ちて、姉が小路西の洞院の内裏、高松殿等を窺ひ見ると云ふことであるといふにつき、保元元年七月三日、下野守義朝に命じ、東三條に留守役せる藤原光貞、外二人の武士を召捕つて詮議になつた。

鳥羽の院御不例の頃より、新院御謀叛の噂ありしのみならず、武士は方々から集ひ來て、兵器輜重の準備、其他怪しき事は少くない。新院は豫れて思召すには、昔より繼位受禪の事は、必ずしも嫡子に限られど、さりとして人物外戚等を詮議せず位に即ける事はない。然るに母の寵愛といふ簡單な理由から、近衛

院に位をとられ、それさへ恨めしいに、先帝崩御の後は重仁こそ當然帝位に即くべきを又しても思ひがけな。四宮に取られしは、残念である。どうしたならば心が晴れるであらうし、常に習の者に御話しになつた。話變つて、茲に宇治左大臣頼長といふ方は、禪閣殿下藤原忠實の三男で、多くの子女中、父殿下の最愛の子であつた。人品すぐれ、和漢の學、禮儀、記録に詳しく、誠に朝廷の重臣、攝政ともなるべき人物。されば兄法性寺殿の、詩歌手跡に秀でしを貶り、それ等は閑中の翫弄物で、廟堂に必要なきもの、賢臣は必ずしも好むに及ばずしと稱し、自らは信西に就いて學修し、仁義禮智信を正し、賞罰極めて嚴重であつたから、時人「悪左大臣」と稱して畏れた。かく畏れられしもの、其實、極めて心やさしい質で、部下や召使に對してすら、我身の誤なりし時は、直様詫状を遣はすと云ふ風で、是非曲直に明な方であつた。されば久安七年一月十日、攝政關白をさしおいて、内覽の宣旨を賜はつた。諸臣皆驚いたのである。兄の法性寺殿は關白は名ばかり、政務の實事に關せざりし

ことゝて、此宣旨に且つ驚き且つ憤り、「關白を辭すべきか、但しは藤家の長者及内覽を關白につけて賜はるか」と、陛下に迫まつた程である。此關白は温厚の質、兄弟禮に厚かつたが、後には兄弟の折合よからぬ様に聞こえた。

されば、左大臣頼長は心中ひそかに一の院は崩御になつたから、重仁親王を位につけ、天下の政治を思ふまゝに行はうと思ひ、新院の方に御宿直をするものだから、新院も此大臣を憑とし、種々な事を御相談になつた。或夜のこと、天智帝は舒明帝の太子で、孝徳天皇の皇子數多ありしも位に即き、仁明天皇は嵯峨第二の皇子で、淳和天皇の御子達を擱きて踐祚あり。花山は一條に、三條は後朱雀に先立たれしに、我身徳少しと雖も、先帝の太子と生れ萬乘の位を忝うしたのである。然るに讓位の止み難きあらば、重仁こそ位に即くべきに、文武共に其器ならぬ四の宮に先を越されて、父子憂に沈む。さり乍ら、故院在世中二年は餘儀なく年を送りしが、今や我れ天下を奪ふに、神慮人望に背くべきか」との御下問。左府は我身の攝政疑なしと悦び、「御思召、御最もに存じまする」と

御勸め申した。新院此御企で、鳥羽の御所を御出ましになるとの仰せに、何事とも知らぬ京中の上下貴賤は、家財道具を東西に運びかくすやら、中々の混雜である。世の人は「凡慮の推知するに由なければ、新院は國を奪ひ給ふとも、故院崩後旬日にして、かゝる御企あるべきか。近年世漸く治まりたるに、また亂れ始めるか、情ない事である」と、互に歎き合つた。

【官軍方々手分】 また一方には宮中でも、新院御謀叛の由聞えし故、保元元年七月五日、武士共を御召しになる。下野守義朝、陸奥の新判官義康、安藝の判官基盛以下の諸將雲霞の大勢を率ゐて高松殿に參れば、南庭に於て、「一院崩後諸國より武士共都に集る由、以ての外狼藉、弓箭を手にせるものは皆召捕れ」といふ仰がある。義朝、義康は内裏にあつて君を守護し、其他は、皆關々へ向へとの事。皆それらの地點に向つた。翌六日の事、基盛は、白青の狩衣淺黄絲の鎧、上折の烏帽子に白星の兜、黒馬に黒鞍置いて、切斑の矢に二所藤の弓を持ち、百騎計を従へて大和路を南に向へば、一の橋邊で物の具に身を固

めし二十餘人の兵に遭ふ。基盛「何處の者ぞ、何處へ参る、内裏へ参るならばよし、然らぬものは一步も通すまじ。」と、我身の系圖を述べて呼びかけると、大將と思ほしき禰の直垂に藍白地を黄にした鎧に、黒羽の矢、塗籠藤の弓をもち、黄河原毛なる馬に乗つたる者、系圖をのべ宇野の七郎源の親治と名乗り、新院方へ参るべき由をのべ、雙方小競合をなし中々引分かれようともせぬ。

親治等生捕らるる。其内、基盛合戦の事高松殿に聞え、數多の兵共は走せつけ。基盛は下知して親治以下十六騎を生捕り、参内、此由を奏聞して再び宇治へ向つた。主上御感の餘り、其夜直ちに正四位下に叙せられた。

新院御謀叛露顯並に調伏 附、内府實能意見

同日關白以下諸卿参内、謀叛露顯の事、東三條にて内裏を呪詛せしこと等につき評議あり、左大臣流罪と定まり、義朝をして召させられる。義朝は東三條に行つても門戸堅く閉ざしてある。依て西表南小門を破り入り、折柄祈禱中の僧勝尊を搦め捕り、左大臣の書狀を得て歸つた。狀は七月二日、頼長より勝尊に送つたもので、調伏

を依頼したものである。これにより、新院御謀叛並に調伏の事明かになり、且つ軍の部署などそれく定まりし事洩れし故、主上、其人々を御召しになれど何れも参らぬ。其上、故院七日の御佛事に新院は御見えにならぬのみか、都へ御出ましになる御所存である。左京大夫教長、色々御諫め申したれど、御聞入れにならぬ。教長は、兄の徳大寺内大臣實能の許に行き、斯くくの企と告げると、實能は驚き且つ歎き、「我神國は神々の加護あり、帝位は畢竟望むも得難い御後悔遊ばすべきであると申せ」と云つて、教長をかへした。教長は再び院に此由を申上げるけれども、院は只「われ此儘にあつては難に遭はねばならぬ、其難を避けに出るに外ならぬ。」と仰せられて御取上げがない。七月十日、宇治なる左大臣に、忠正、頼憲兩人を召し参るべき宣旨を賜へば、即時に参るべき返事があつた。新院は十一日の夜更けて、田中殿より白河の御所へ、教長以下の御供で行幸があつた。

新院爲義を召す、附、鶴の丸

茲に、六條判官源爲義はどう思つたもの

か、内裏より召されても参らず、まして上皇の御召にも従はなかつたが、度々  
 白河殿より御召しになるので、参ると申し乍ら参るでもない。そこで教長卿は  
 堀河なる爲義の家に行つて、院宣の旨を傳へた。すると爲義は「戦と申しても  
 十四の年美濃の前司義綱を搦め捕つたこと、十八の時、奈良の僧徒の都へ攻  
 め上るのを、十七騎で栗栖野に迎へて、數萬騎追ひ返した時との外は、戦とい  
 ふ程の事をした事はない。従つて戦の道に拙い上、年も早七十、物の役にはと  
 ても立たぬから、内裏の御召しにも病氣と申して参らぬ次第。其上先夜重代傳  
 はつて居る、月數、日數、源太が産衣、八龍、澤瀉、薄金、楯無、膝丸といふ  
 八領の鎧が辻風に吹かれて方々へ散つてしまつたといふ夢見を致しましたから  
 どうぞ此度の大將は、別の人に仰付けて戴きたい」といふ。教長はそれに對し  
 て「夢などは儂ないものである、其上武將として夢見物忌などを苦にするとは  
 あるまじき事、院へ申上げられる。必ず來よ」といへば、「それでは、子供の中  
 で、坂東育ちの義朝なら、少しは御役に立つべきなれど、既に内裏に召されし

故、八郎爲朝を参らすにより、これに軍の事を仰せ下さい。力も弓も勝れた達  
 者であります。」と、爲義は八郎爲朝を遣はすことに決心する。教長は更に「其  
 返事も院に参じて申へきに、院宣に對し私宅に居乍らの返答は禮にあるまじ。  
 と責める。爲義最もの事と思ひ、爲朝外五子を従へて白河殿へ参つた。新院は  
 御感になり、賞を賜ひ、殊には鶉の丸といふ名刀をさへ賜はつた。此刀の名の  
 起りは、白河院が神泉苑で、鶉をつかはせて御覽になつた時、鶉が水底から一  
 口の太刀を銜へ上げた、定めし靈劍であらうとて、其際鶉の丸と御命名になつ  
 たもので、これを此度賜はつたのである。爲義は此度は最後の合戦と思ひ、重  
 代の鎧一領づゝ子供に着せ、自らは薄金を着、嫡子に傳ふべき源太が産衣と膝  
 丸とは義朝へ遣はした。殊に膝丸は牛千頭の膝皮で緘した重寶であるが、これ  
 をしも敵となるべき我子の許へ遣はした親の心は、どんな心地がしたであらう。

〔左府頼政上洛、附、着到〕 兎角する内に、左大臣頼長は、供勢を従へ  
 夜中に基盛が陣の前を通つて、醍醐路から白河殿へ入つた。九日に院方から内

裏へ御状が届いた。

これに對し、同じ日御返事があつたので、それを頼長に御示しになつた。新院の方に參つた者は頼長、教長以下多くの諸卿と、爲義父子以下一千餘騎の軍兵とである。

官軍召集めらる

さて官軍の方はと見れば、故院御在世中、斯かる場合に

參るべき様、記名し置かれし、義朝、義康、頼政、季實以下の面々。清盛は事情あつて記名なかりしも美福門院の御計らひで、此際參つて内裏を守護すべき由の御使をうけたので、一族を率ゐて參る。公卿には關白、内大臣實能以下の諸卿が參つた。

新院御所各門々固め、附、軍評定

新院は、春日通の半なる北殿に御

移りになる。東の門は平馬の助忠正等二百餘騎、西の門は六條判官爲義等百騎許りで固め、好んで難關に當るべしとはやれる爲朝は、西河原表の門を、北の春日表の門は、左衛門の大夫家弘以下百五十騎で固めた。爲朝は剛氣大力、弓

の名人で、幼時より傍若無人の振舞あり、十三の時鎮西へ追ひ下され、自ら九國總追捕使と稱して處々を荒らし、十三歳より十五歳の間に合戦二十餘回、三年内に九州を攻めつくした位。訴により久壽元年洛を命ぜられても従はず、累を父に及ぼすに及んで、急遽京へ歸り、以て今回の軍に加はつたのである。彼れ身の丈七尺、紺地に獅子の丸を縫うた直垂に、八龍に似せた大荒日の鎧、三尺五寸の太刀に、五人張の七尺五寸といふ大弓を持ち、兜を郎等に持たせて歩み出す光景は、宛ら樊噲其儘である。上皇始め人々は皆音に聞く爲朝を見ようとする。やがて左大臣より戦の計畫を申せとある。爲朝畏つて、九國にて隨分戦の経験も仕つたが、軍の利は夜討に限る。されば高松殿へ押寄せて、三方に火を放ち、一方開け置いて遁れ出るのを射るがよい。兄義朝は少しは手答へもあらうが、其他は皆知れた者。清盛風情は鎧の袖で撥飛ばせる。止むなくして行幸になる際、御供を少々射たならば、駕身も御輿を捨て、逃げるに相違ない。其時行幸を此御所に迎へるのである。即ち我が矢を放つ二三、天明に先つ



て勝敗を決するは譯もない。」と憚らず言上した。されど血氣にはやる若武者の謀議として退けられ、且つは今夜宇治に入るべき南都の僧徒千餘騎の到るを迎へて、合戦することになった。爲朝は「合戦の道は武士に任すべきに、明日までのびればこそ僧徒なども入用になるのである。今夜討たれば定めし義朝に夜討せられるであらう、残念なことだ。」とひそかに嘆きつぶやいた。

將軍塚鳴動、附、慧星出づ

鳥羽殿には故院の舊臣達が籠つて居て話し合

ふには「八日から東方に慧星があらはれ、將軍塚が頻りに鳴動する。新院の御所には軍兵數千、召しに應ぜぬ公卿は首をばね、内裏にも火をかけるとか云ふ噂。一院崩後旬日にしてかゝる不詳事の起るとは、天照大神の御照覽もつきたのであらうか。」などと云つて居る。中にも光頼卿は數多歴史上の事實を引いて我國の神國にして三寶も國家を守るべく、神明も帝祚を見捨て給はざるべきを説き、將門純友の亂、貞任宗任の謀叛も、結局都の亂に及ばずして皇化に遵ひしなれば、今と雖も誰か此都を亡ぼし、何者か我君を傾け奉ることが出来よう

と、たのもしげに述べられた。

主上三條殿行幸、附、官軍勢ぞろへ

内裏は高松殿なので、狭い譯から

俄に東三條殿へ行幸となつた。主上は御引直衣に神璽神劍を取つて腰輿に召される。御供は關白、内大臣以下の諸卿と、數多の武士共とである。其時義朝を御前に召し、少納言入道信西をして、軍略を御下問になる。赤地の錦の直垂に折烏帽子引き立て、脇楯あたりに太刀佩いた義朝は、やをら畏つて「即時に功を奏するには夜討に越した事はなく、殊に南都、吉野の僧兵は明朝入洛すること。敵勢の増さぬに先ち押寄せるに限りまします。清盛に内裏を守護せしめらるべく、此身は參つて直ちに勝負を決し申すべし。」と伏奏した。信西は關白の意見を伺ひ、さて義朝に向つて、「公卿は詩歌管絃を弄べども猶且つ味い、況んや武藝の道、一に其方の計らひたるべく、先んずれば人を制す、今夜の發向最も至極である。清盛も留るに及ばず、共に參つて兇徒を追討し、早く叡慮を安んじ奉れ。然る上は豫れて希望の昇殿は疑ない」との御諛。義朝は「合戦に

臨んでいかで餘命を得よう、冥途の思出に只今昇殿をゆるされ度い」と、早くも階上へ昇れば、信西之を制したが、主上は却つて興に入らせられた。十一日寅の刻、官軍ははや院の御所へ押しよせる。義朝に従ふ東國勢は、鎌田の次郎・後藤兵衛實基・佐々木の源三・八島の冠者等以下の強の者を始めとして三百餘騎。清盛に従ふものは、弟頼盛・淡路の守教盛・嫡子重盛の諸將以下六百餘騎。又兵庫の頭源頼政は、播摩次郎・薩摩の兵衛以下二百騎計を従へ其他總計千七百餘騎と註せられた。

卷 二

義朝白河殿夜討 新院方には、かくとも知られば、左大臣は人をして内裏の様子を窺はしめると、官軍の先陣は既に押し寄せるとの事。爲朝切齒扼腕すれども致方ない。兎角する内に義朝は二條から東へ向ひ、清盛もつといて三條から河原に出で、北進する。かゝる次第故、新院の御所でも爲義以下各用意を

する。頼賢と爲朝と烈しい先陣争の後、結局爲朝は差控へ、如何なる難局にも當ることとして、頼賢が先陣した。紺村濃の直垂に、朽葉色の唐綾で緘した月敷と云ふ鎧を着、重藤の弓取り、月毛の駒に跨がつて、「寄せ来る者は源氏が平家か、かく云ふ自分は六條判官爲義が四男、前の左衛門尉頼賢」と名乗る。河向で答へる、下野守殿の郎等、相模の國の住人、瀧口俊綱、此度の先陣を承つた。「さては一家の郎等か、汝風情を射るにあらず、大將軍を射よう」と云つて、暗中河越に二矢を放つた。矢面に進んだ二騎が射落された。義朝は矢合せに郎等を射られて面白からず、直様駆け出さうとしたが、鎌田の次郎正清に制止せられ、正清が代つて真先に駆け進んだ。清盛は二條河原の東堤に控へて居たが、其勢の五十騎許が先陣に押し寄せた。此正面に當つたのが爲朝の勢である。源平互に祖先以來の系圖自慢や、手柄自慢を交換し乍ら、爲朝、「くだらぬ敵とは思へども、汝が言葉のけなげさに、矢を一つ戴かせよう。うけて御覽じ生きての光榮、死なば思出。」と、云ひも果てず、七寸五分の丸根の矢を、發止

と放つた。此矢に當つた者二人、一人は死んだ。清盛以下此矢を見て舌を捲き後三年の役に於ける義家が弓の強かつた事は聞いて居るが、まのあたりかゝる強弩の勢を見る事もあるものかと、敵乍らも賛嘆する。少し怖氣づいて引かうとする時、嫡子重盛、當年十九歳、赤地の錦の直垂、澤瀉緘の鎧を着、白星の兜を戴き、黄河原毛なる馬に乗つて進み出で、救命によつて参り乍ら、敵が強いとて引返すことがあるものか。」と云ひ乍ら、真先に突進する。清盛之を見て、「馬鹿なことをする。爲朝が弓の恐さは知れて居るに。あれとやめよ者共。」と下知して、重盛は心ならずも制止せられた。又、山田の小三郎伊行と云ふ平家方の剛の者は、是非爲朝の一矢をうけて手柄にせんとて、名乗りかけた。爲朝は、此奴必ず我矢を放つ前に、我に矢を送る所存であらうと思ひ乍ら、「八郎爲朝此處に居る。」と云ふか云はぬに、果たして彼れば矢を送つた。うまく當らぬ。二の矢を番へる所を、爲朝が手早く射つけたので、小三郎は眞逆様に馬から落ちた。これを見た平家方では、益々爲朝の門へ向はうともしない。

「白河殿攻落し」やがて夜が明けようと云ふ頃、爲朝の鎧を貰うた放れ駒が、義朝の陣中へ迷ひ込むと、つはもの共は驚く。義朝は、「爲朝がこちらを嚇さうとて放つたものだらう。臆してはならぬ。鎌田、一鞭あてよ」との事に鎌田の次郎は百騎許を率ゐて爲朝の門に向つた。爲朝は生捕りにしようとして追ひ廻はす鎌田は引きかへす。爲朝も年老いた父を氣遣うて陣へ歸つた。今度は愈々義朝が陣頭に立つて、二百餘騎を率ゐ驅けつけると、爲朝は寶莊嚴院の西裏に之を迎へ、電光石火の如く戦うた。赤地の錦の直垂、黒絲緘の鎧に、鍬形打つた兜を着、黒馬に黒鞍おいて乗つた義朝は、大音揚げて、系圖並びに勅命により征伐に向ひし旨を述べ、若し、一族の者あらば速かに陣を開いて退散せよと云へば、爲朝は、父が院宣を蒙つて大將軍となり、彼れは其代理として、一方を固めて居る旨を答へる。義朝は、「弟の分際として兄に弓ひくこと、殊には勅命を蒙つた身に對して、野當りである。弓を伏せて降参せよ。」と云へば、爲朝は又「兄に向つて弓引く野當りは聞えた、院宣を蒙つた父に弓引くは如何なもので

御座る。とやりこめる。其内に義朝勢は續々打ちかゝつて来る。父を氣遣うて爲朝は一旦門内に退くと、勢に乗じて門際まで攻め寄せる。爲朝は一矢に兄を射透さうと思つたが、父子敵味方になるにつけては、何か父と約束があるではあるまいかと、番へかけた矢をはずした殊勝さ。爲朝の矢に當つて助かるものはない。されば罪作りをせぬつもりで、名乗り出る者の外には矢を向けない。弓はずぐれて居るが、刀軍となつては坂東勢には叶はぬから、弓軍の内に追ひのけようと思ひ、義朝が兜の星を見事に射た。義朝は聞きしに劣る技量である。と冷笑すれば、兄上なる上、仔細有て態に差控へたが、誠に御免下らば二の矢を仕らうとして、番へる處へ、危くも深巢の七郎清國といふが驅けつけたので、之を射つけると、兜の三の板から左の小耳へ突きぬけて清國は即死した。又鎌倉権五郎景政が裔大庭景能も名乗りかけて、爲朝が矢に膝と馬の脰とを射られる。其他、悪七別當・海老名の源八、齋藤別當實盛が巴になつての組討。金子十郎家忠と高間の四郎が組討に、高間の三郎が助太刀も甲斐なく、高間兄弟

を討ち取つた家忠が高名もあり、三町礫の紀平次大夫・仙波の七郎・根の井の大彌太・手取の與次・鬼田の與三など云ふ敵味方の勇士、處々方々に組んづはぐれつ、寄せつ離れつ、猛虎鷲鳥の如く相戦ふと雖も、勝敗は中々に決しない。其時義朝は内裏へ使者を立て、戦況困難にして火を放つ外道なき旨の勅許を請うた。「手段は選ばぬ、速に兇徒誅戮の謀を講ぜよ。」との御説。茲に於て、御所の西なる藤中納言家成卿の邸に火をかけると、折からの西風に、火勢猛烈となり、忽ち院の御所に燃え移り、女房子供は泣き叫んで惑ふ。武士は手足纏で進退自由ならず、自然と落ち行く有様は、峰の嵐に誘はるゝ、冬の木の葉宛然である。

〔新院左府御没落〕 かゝれば、右衛門大夫家弘、馬にて驅け來り、官軍は雲霞の如き大勢の上、猛火既に御所に及びしにつき、何處にか御避難あるべき由を奏上すると、上皇も左府も今更のやうに打ち驚いて、馬に召されたが覺束なさうなので、藏人信實は上皇の御馬の尻に、今一人は左府の馬の尻に乗つて抱

き参らせた。北白河さして落ち給ふ時、何處よりか一筋の流矢、左大臣の首骨に當ると、眞倒に落馬して、色々に介抱するけれど、瀧と流るゝ血潮は中々に止まらない。漸く車を取りよせてこれにのせ、辛うじて嵯峨の方へ落ち延びることが出来た。

新院御出家

上皇は、爲義・家弘以下少勢の者の御供で、如意山へ入らせられた。道嶮しければ馬を捨て、御徒歩にならせられたが、習はせられぬこととて、御手を引き御腰を押し奉れども、御足からは血が流れる。喉は喝けども水はなし。殆んど絶え入るばかりである。漸く水を求め得て一息つがせられて皆の者に向ひ、「朕は此處で休息するにより、一同は早く落ち延びよ。敵追ひつかば降を乞ふばかり。」と仰せになる。固より誰れとて去るものはない。「院と共に東國へでも」と申上ぐれど御聞入れなく、「皆は早く落ちよ」と再三仰せになる。此上仰せに従はればかへつて恐れ多い次第と、家弘と其子光弘とを残して他は散々に分れて仕舞つた。此二人は院を谷へおろし参らせ、柴などを折りか

け奉り、日の暮るゝを待つ内に、御出家あり度き旨の仰あれど、此山中では致方ない。日が全く暮れてから、肩にかけ参らせ、阿波の局の許・教長卿の邸・少輔の内侍が許と御尋ねになるけれども、此動亂で何れも門を固く閉ざして人氣もしない。世界廣しと雖も御身を入るべき處なく、東西南北何れに行幸なるべき處もないのである。夜もすがら廻り歩いて、漸く怪しげな僧房に入り、此處で御髪を御下し遊ばせば、つゞいて光弘も鬢を切つた。後、仁和寺へ移しまゐらせ、光弘は是より御暇申し、北山の方へ行つて出家した。

朝敵の宿所を焼拂ふ

かくの如く、院も左府も行方知れず落ちさせられしにより、義朝・清盛は、未の刻に参内して、此由奏聞に及んだ。叡感誠に懇ろである。やがて、周防の判官季實・助經判官其他の面々、仰せにより新院の御所・左府の亭、其他謀叛人の宿所十二ヶ所も焼き拂つた。一方南都の勢に備ふるため宇治橋も固められた。頼賢・爲朝以下は頗る力戦したけれど、間もなく攻め立てられ、朝敵は宛ら風前の塵の如く、聖運は日月と共に隆盛である。

關白殿本官に復歸、附、武士に勸賞を行はる。院方敗北と聞きし  
 宇治大相國忠實は、宇治橋をひかせ、公達三人をつれて南都へ落ち、僧徒・土  
 民を語らうて官軍を防ぐ所存と見える。末子頼長を偏愛の結果、天下の大亂を  
 惹起した様なものゝ、自らは何の畏怖することもないに、此企あるは、今度の  
 騷亂の二の舞を踏むに過ぎぬと、世の人は皆賤んだ。十一日夜に入つて、關白  
 殿は氏の長者になられ、子の刻に及んで、武士に勸賞が行はれる。清盛は播磨  
 の守に、義朝は左馬の權の頭に、義康は藏人に任じて昇殿を許された。義朝は  
 君命なればこそ、父兄弟に弓を引くてふ爲し難き不義を敢てせしに、權の頭で  
 は更に面目とも存ぜぬとの意氣を洩せば、其儀最もであるとして左馬の頭に任  
 ぜられた。

左府薨去、並に大相國忠實御歎き

さてかの左大臣頼長公は、如何になら  
 れた事であらう。朝廷では勸賞の行はれた翌くる日の十二日、痛手は極めて重

態乍ら、未だ目は動く。奈良へ下しまゐらせようとて、梅津の里から小船で桂  
 河を下り、其夜は賀茂川尻に留つて、十三日、木津に入られし頃は、殆んど今  
 を限りに見えた。圖書の允俊成、急いで此旨を與福寺なる大相國に註進する。  
 相國は、迎へ入れ度いは勿論ながら、見るに忍びぬと思はされたのであらう、  
 「やよ俊成、思ひ見よ、氏の長者とあるべき者が、兵仗の先にかゝるとは以つ  
 ての外。然る不運者は見度うもない、見えすまい、何方なりと退れと申せ」  
 と、心強うはのたまうたが、さすがに咽ぶ涙は匿す由もない。此趣傳へられた  
 左府の氣色は俄かに變り、舌の尖を嚙ひ切られた。一同當惑したが、十四日、  
 奈良のとある小屋に昇ぎ入れて、休め申したけれど、終に其日の午の刻に穽れ  
 てしまつた。其夜直様、般若野に葬るといふ哀れな最期である。最後まで宮仕  
 へした藏人の太夫經憲は、即ち出家し、興福寺の禪定院に參つて、ありし物語  
 を入道相國に打ち語れば、北の方、同胞、皆悲しみ泣く事一通りならぬ。相國  
 も御手を顔に押しあて、やゝ暫し言葉も無かつたが、何か云ひ置いた事はな

いか、此世の名残さぞ惜しかつた事であらう。攝政關白をもさせて見たかりしに、今此悲みを見るは、前世の宿業か。命を惜まぬ武士の輩、月卿雲客の數々も、討たれしは稀れと聞くに、何人の放ちし流れ矢に當つた不運であらう。いと歎き乍ら、我子の運命に似通ふ類を求めて、少しの心やりとしたい思ひか、流矢に當りし漢の高祖、大臣にして誅をうけし圓の大臣・眞鳥の大臣・守屋の大臣・豊浦の大臣、其他を合せて八人を數へても、氏の長者たるものにして、未だう箭の先にかゝりし例はない。東國・西海にてもあるならば、駒に鞭、船に棹して、尋れ行く術もあるべきに、行きて歸らぬ別れほど、世に悲しきは無いと、老いの心を憐まして悲しまるゝ有様は、よその見る目もあはれである。此殿を失うては、職事辨官の故實も亡び、帝闕・仙洞の朝儀も廢れるに相違ないと、世の人も亦惜んだ。攝録の家に生れ、萬機内覽を蒙る底の器量人にして、成敗の明を缺きしは、世の皆訝かつた所であるが、嘗て弱冠の頃、病中の徒然に、信西と卜占の論をした事がある。互に説をなしたが、遂信西が負けた。論

果て、後、頼長に向ひ、「才學既に朝に並ぶものなし、此上の學文は御身の崇りとなる。」と云つて、學文を止めた。今にして思へば學問を止めたのではない、弟子を知るもの師に如かず、才智に誇る所あるを誡めたに外ならぬ。才智勝るれば、人臣に矜り、天下に高ぶり、遂に國を亡ぼす基となること、和漢古今に其例乏しくはない。左府亦此例に洩れなかつたのである。

〔重成勅を奉じ、新院を守護し奉る〕 新院は其後寛遍法務の坊へ入れまゐらせた。五の宮と申すは、主上にも院にも御弟に當らせられる。其五の宮から主上へ、院の御有様を申上げると、院の守護として、佐渡の式部大輔重成といふを御遣はしになる。院は心憂く思召したのであらう、次の如く遊ばされた。

思ひきや身をうき雲となしはて、嵐の風にまかすべしとは。  
憂きことのまどろむ程は忘れられて、覺むれば夢の心地こそすれ。

謀叛人召捕らる 院の此頃と左府の終りとは右の如くである。其他の者は或は遠國へ落ち、或は深山に逃げ隠れてしまつたが、追々に出家の姿となつて

あらはれて来る。左京大夫教長、近江の中將成雅の二人は太秦に出家せるを召捕られる。其他心からならぬ俄道心も尠なからぬ事であつたらう。皇后宮權の大夫師光・備後の守俊通・能登守家長・式部の大輔盛憲・弟經憲等も捕はれ中にも盛憲兄弟は、左府の外戚たる故を以つて、近衛の院・美福門院を呪詛せしことを知るべしとして、勅負廳で拷訊が始まる。手を合せて哀願すれど、刑は型の如く拷訊七十五度に及んでは、息も絶え入るばかり。日もあらうに今日しも七月十五日、無慙の極みである。其上、五位以上にして、拷器にかけらる者、貞觀十八年、應天門の焼けし時、伴大納言善男の例を外にしては、近來世に類例のない情ない例であるといはれた。

〔重仁親王御出家〕 新院の一の宮、重仁親王の御行方も、探し居る内、十五日、女車に乗つて朱雀門の前を過ぎ給ふを、平實俊留め申すに、御出家のため仁和寺へ向はせらるゝとのこと、此由奏聞すれば、「思ふに委させよ」と仰せられる。やがて、中の御門東の洞院に遷し、實俊が守護しまゐらせた。

〔爲義降参す〕 落ち分けし爲義は、どうしたであらう。尋ね出すべき由を清盛に仰せ付けられた。彼れは三百餘騎を率ゐて、如意山を越え、三井寺・東坂本と求めるけれど探し得ぬ。爲義は、直河と云ふ邊にかくれ居たけれど、官軍發向と聞いて、三河の三郎大夫近末といふ者の家に足をとめ、やがて東國へ下らうと思つて居る内、運悪くも病氣になつた。此時、附き従ふ者子供の外に僅か十八人。痛はり乍ら漸く馬に乗せ、箕浦の方へ行つて船に乗らうといふ時、三十騎許りの兵の襲來をうけ、賴賢以下力戦して、追ひ退けたけれど、部下は大方四散してしまつた。愈々頼み少く心細いに加へて、關所々々も堅く守られる様子なので、東國下向も覺束ない。止むを得ず、再び三郎大夫方へ立ち戻り十七日に、黒谷といふ處で出家をし、法名を義法房とつけて貰つた。十四の年から武功を輝かし、陸奥の守になりたいと云ふが、生涯の希望であつたが、種々の事情から達せられず、遂に出家する破目となつたのである。義法房、子供を集めて云ふには、「吾は、義朝を憑んで都へ出よう、彼れが勳功に替へても、命



だけは助かりさうなもの。もし助からば、皆をよびよせる程に、それまでは、  
 木の蔭・岩の間にも隠れて居よ。聞きも終らず爲朝は、「それはいけませぬ。親  
 子の間柄故、最もなれど、主上が御許しあるまい。其譯は、新院は主上の御兄  
 上、左府は關白の弟でいらせられる。而かも些の斟酌はない。義朝、如何に申  
 請はれても所詮は駄目。御快癒をまつて東國へ下るに如かぬ。」と遮れども、「落  
 人となつては、何事も叶はぬ故、降参する」とて、早くも山より下りかゝれば、  
 夜は漸く明けて、峰の横雲も晴れ、鳥は頼りに友を呼ぶ。子供等は「暫らく御  
 待ち下さい、申上げる事があります。」と呼び戻すので、入道は、「何事か」と、  
 立歸つても、別に云ふ事もなく、前後左右を取り圍んで、啜り泣くばかり。今  
 を限りに、再び逢瀬もあるまいと思ふ子供の、名残を惜むも理りである。「古い  
 の頭に兜を戴き、合戦するのも、我身の榮華を得よう爲ではない。運開けなば  
 汝等を世に人らしくしても見度いからの事。又、今、義朝を憑むも、我れ安穩  
 ならば、其蔭に、御身等を助けようとに外ならぬ。皆を捨て、我のみ助から

うためと推し居るか。齡既に七旬、何の餘榮を望まう。よく隠れて待て。」と心  
 強く云ひ放つたが、名残り惜しいか、又立ち歸つて、「頼賢・頼仲、云ふ事があ  
 る。」と、呼び戻しても、別に云ふべき事もない。斯く互に別れを惜めど、所詮  
 盡くべき名残なられば、各々、ちり／＼に別れ行く。鳥にあらすして四鳥の別  
 れをなし、魚にあらすして釣魚の恨を含む」とは、斯くの如き謂か。落ち行く  
 先は、小原・静原・芹生の里・鞍馬・貴船のあたりであらう。蕭條たる秋の空、  
 露・時雨、否我袖の涙もそれには劣らぬ。入道は、賀茂川を渡り、糺の森より  
 使もて、遁れ來りし由を申送れば、左馬の頭は、夜に入つて輿を遣はし、判官  
 を迎へ取つた。

## 謀叛人誅せらる

平馬の助忠正は、浄土谷といふ處に出家して隠れて居たが、

爲義も降参したと聞き、子供四人引連れ、甥の播磨の守清盛を憑よつて來た。  
 左衛門の大夫正弘は其子、家弘・頼弘・光弘、孫、安弘と共に搦め捕られて、  
 大江山で斬られ、大炊の助度弘は、六條河原で斬られた。忠正は、嫡子長盛、

及び其二男・三男・四男と合せて五人、清盛、承つて、これも同じく六條河原で斬つた。清盛を頼まば命だけと思ひ、降参したに、清盛、もし助ける氣あらば、助け得可きを、斬つたのは、叔父・甥、不快の上、義朝に父を斬らせようの下心であるとは、世にも慘酷なくらみといはねばならぬ。

〔爲義の最期〕案に違はず、爲義が頭を刎ぬべき宣旨が、義朝に下る。宥された旨、二度迄も奏聞したけれど、主上一向に御取上げがない。「清盛既に叔父を誅したではないか、甥は猶ほ子の如し」とある。然れば、叔父・父、何の違ひがある。速かに誅戮に及べ。違背せば清盛以下の武士に命ずる。」と、勅諭中々に嚴重である。義朝、涙を押へて、鎌田の次郎に向ひ、「綸言引かへすべき由もない。さればとて討ち奉らば、五逆の一を犯すべく、罪障を恐れて宣旨に背かば、違勅の臣となる。如何すべきであらう。」と相談する。鎌田、謹んで申すには、「恐れながら、知れ切つたことの御下問と存する。私の戦に父を討たば、彼の逆罪にも當りませう。又、彼の觀經には『劫初以來、父を殺す惡王一萬八千

人なりと雖、未だ母を殺す者なし。」と説かれてある。最もそれは、惡王國を奪はうため、これは朝敵となつたことの相違こそあれ、所詮遁れぬ御いのちとならば、愁、人手にかけようより、御手にかけまゐらせて、後の御孝養然るべしと存じます。と答へる。「然らば、汝、よきに取計らへ。」とばかり、義朝は泣く／＼内へ入る。やがて鎌田は、入道の方へ参り、「當時都は、平家のやから權威をふるひ、頭の殿の危き事、石の間の蜘蛛さながら。よつて、殿には東へ下らんとの御意。判官殿を先きに御送り申さんため、御迎へに参つて御座りまする。」と、車をさし寄せれば、何事も知らぬ爲義は「然らば、今一度八幡へ参つて、御暇乞申せばよかつたに。」と、南方を伏し拜んでかの車に乗る。七條朱雀に、白木の輿を用意して置いた。これは、車より此輿に乗りうつる時、討たうと云ふ考なのである。時に、秦野の次郎延景は、鎌田に向つて、「御許の計らひは、誤つて居よう。誰しも一生の最期は一大事である。云ひ遣し度いこともあるであらう。また、最後の念佛も勸むべきであるに、だまし討とは、武士の

最期、餘りに憐れではないか。」と云ふに、鎌田も最も思ひ、「苦しい思をかけ申すまいとの一念より、斯くは取り計らうたなれど、成程、これは手前の誤りであつた。」と同意する。そこで、延景は、爲義に向ひ、「實は、關東下向ではありませぬ。左馬の頭殿、宣旨を蒙られ、正清、太刀を執つて、失ひまゐらせよとの儀。殿は、再三御宥されを申請はれても、いつかな、御取上げ叶はぬ故、心靜かに御念佛遊ばせ。」と、つゝます有りの儘を打ち明けければ、「情ない仕打ちである。爲義程の者を、何のいつはらずとも、討たすがよい。たとへ、綸言里くして助け難しとならば、始めよりなせ有りの儘には聞かせぬ。眞に助けようと思はゞ、其身に替へても助けられさうなもの。義朝もし、爲義を憐むべき場合もありとせば、爲義、命に替へて助ける。さばれ、諸佛念衆生、衆生不念佛、父母常念子、子不念父母」とも説きあれば、親の様に子の思はぬこと、義朝一人が罪とも云へぬ。只恨めしいは、始めよりそれと知らせざりしことぞ。」と、念佛百遍ばかり唱へ乍ら、別に命を惜む様も見えぬ。「時たゞば、爲義が頸斬る

を見に、雜人共が寄りたかるであらう。疾く斬れ。」と迫き立てらるゝまゝに、鎌田の次郎、刀を抜いて後ろへ廻つたが、代々恩顧の主の頸に、太刀あてることと思へば、目が昏んで、太刀の當て處もわからぬ。止むを得ず人に渡した。やがて、爲義は、「見彌陀來迎、往生安樂國」と唱へ終ると共に、其首は前に落ちた。

首實檢の後、義朝に賜はつて、後の孝養をつくせとの仰せである。正清之を請け取り、圓覺寺に收め、懇ろに孝養をつくした。

十九日には、源平七十餘人の者が頭を刎られたは、誠にあさましい事である。昔、嵯峨天皇の時、左兵衛の督仲成といふ者が、誅せられてこのかた、死刑といふものは、停めてあつたのに、今復た、故院の御中陰にも拘らず此刑を行はるゝに至つたは、入道信西の議であつて、多くの凶徒を赦して、諸國へ下らせたらば、後來また、兵亂の恐れある上、非常の事は一人に人君の裁斷を仰がればならぬ。後、重ねて不詳事起らば、後悔すとも何の益もない、といふ様な考

から、斯くも多くの人を誅せられたのである。中にも義朝に父を斬らせられし一事は、前代未聞の事であつて、朝廷の御諛りとも申すべく、義朝の不覺とも云はればならぬ。

違背し難き勅命によつて、父を誅せば、忠であるか、信であらうか。もし、忠なりと云はゞ、「忠臣は孝子の門に求む」といふ、果して其孝子に當るか。又、もし信なりと云はゞ、「信は義に近くせよ」と云ふ、其義に近い行爲であるか。君は至つて尊けれど至つて親しからず、母は至つて親しけれど、至つて尊からず。茲に於いてか、父のみは尊・親の二義をかれ、母よりも尊く、君よりも親しい、如何にして之を殺すことが出来よう。彼の孟子は、斯かる場合に處すべき、人の子の態度をば賢君舜帝を假りて教へた。即ち、舜天子たる時、其父人を殺し國吏之を捕へて罪を奏する時、舜は如何にすべきかといふのである。政道に正直なるは舜の徳、然るに、父の故を以つて其大犯を赦さば、即ち政道を穢すべく、若し政道を正しくし刑を行はゞ、又即ち孝道に背かう。明君は孝を以つて

天下を治む。然れば、父を負ひ、位を捨て去るに如かずと判じて居る。君主だに斯くの如し、況んや義朝に於てをやである。誠に救はうと思はゞ、其道必ずしも無いではない。然るに其舉に出でざりしは、孝に於て義に於て、缺くる者と云はればならぬ。されば、大忠にふさはしき賞にも預からず、また幾くもなく身を亡ぼすにも至つたのである。

義朝の弟共誅せらる

爲義の最期は右の通りであつた。然るに、父と共に院

に参つた六人の子供を探し出せとの宣旨が、重ねて義朝へ下つた。云ふまでもなく、搦め捕つて誅戮するためである。義朝、畏つて諸方へ兵を出し、此處彼處から探し出したが、獨り爲朝は、何處へか去つて、皆自行方不明である。四郎左衛門頼賢・掃部の助頼仲・六郎爲宗・七郎爲成・九郎爲仲、以上五人。京へは入れず、直に船岡山へつれて行かれ、五人共馬からおりて、並んで居る。最期の水を與へると、何れも疊紙で受ける。中にも掃部の助頼仲は、此水を取り唇を押し拭うて云ふには、「自分は幼い頃から、人の首を斬つた數は夥しい。

恐らくは、其罪の報で今は我身の上になつたのであらう。順から申せば、兄上たる左衛門の尉殿が、御先立ちなされて、其御供仕るべきなれど、『軍門に君の命なく、戦場に兄の禮なし』と申す故、死を先きにする事、必ずしも禮を守らぬと見える。其上、少し仔細がある。皇后宮の御内に近しい女があつて、昨夜も来て會ひたいと申したけれど、面會叶はぬと、心強く云うて歸したものと、定めしまた尋ね来るであらう。最期の様子を見するも甲斐なく、また、ふとして涙などこぼしては見苦しいによつて、御先御免を蒙る。六道の辻では必ず御待ち申す。と云つて、直垂の紐を解き、頸さしのべて斬られた。つゞいて他の四人も斬られたが、何れも見事な最期であつた。故院中陰の故を以つて、首を獄門に掛けることはせられなかつたが、穀倉院の南の池の端へ捨てられた。

卷 三

義朝幼少の弟悉く誅せらる

父爲義を失けせられ、更らに五人の弟共を斬ら

せられても、義朝の難儀は未だに終らぬ。其後、又内裡より義朝を召され、彼れの兄弟はまだある筈、たとへ幼くとも女子の外は、皆尋ね出して亡き者にせよとの御詔が下る。義朝は家に歸り秦野の次郎延景を召して、『あまり不憫ながら、勅詔故據處なし。母か乳母か懐いて、野山に逃げ隠れた者は是非なし。六條堀河に居る四人の弟共をば、連れ出し、途中を苦めず、船岡山で失へ。』と命じた。延景は困つた事と思つたけれど、主命辭し難く、泣く／＼輿を昇がせて赴いた。丁度母は參詣の間で留守であるが、子供達は皆居る。兄は乙若とて十三、次は龜若で十一、鶴若は九つ、天王は七つ。何れも延景を見つけて、嬉しきである。秦野の次郎が判官殿の御使に參じました。殿は比叡山で御落飾の後、頭の殿の御許へ御越しになりしも、世間體面白からずとあつて、北山雲林院と申す處に、忍んで居らせられる。公達の御上が心がよりゆゑ、御連れ申せとのことで、御迎へに參じました。と云へば、乙若が出て、『誠に様を替へ遊ばしたと聞いたばかりで、軍の後ばまだ御姿も拜せず、御懐しく存ずる。』と云つ

て、皆、我れ先きにと輿こしに乗る。冥途めいどの使とも知らず、早くくと輿を迫せき立てる。羊の歩みの近ちかづくをも知らぬ身の上は、何と云ふ氣きの毒どくなことであらう。大宮を上つて、愈々船岡山へ着いた。峰みねの東に輿を身かき据かゑて、どうしたものと思案しあんに暮くるゝ内うち、父上は何處どこに」と、七つになる天王てんわうは、はや走り出る。延景は涙を流して、暫時しばし言ふ詞ことばも知らざりしが、意を決して、「聞き給へ、今はな

んで隠かくしませう。父御前ていごぜんは頭の殿の仰せで、昨日の朝斬られて御しまひになり、御舎ごしやけ兄達も、八郎御曹司おんさうしの外は、五人共昨夜、此表に見える山本で、斬られて御しまひになりました。今日は公達きんたちを賺すかし出し、途中苦しい思をさせ申さぬ様にして失うしなひまゐらせよとの仰せ故、入道殿の御使と申したであります。思召おぼしめす事あらば、延景に仰せ下されて、皆、御念佛ごねんぶつ遊あそばせ。」と云へば、四人共輿こしから降りた。九つになる鶴若つるわかは、「我等四人を助け置かば、郎等百騎にもまさるものな、なぜ失うしなへと云はれるのであらう。下野殿へ使をやり、其故聞かう」と云へば、十一になる龜若かめわかも、「今一度人を遣はして、慥たしかに聞き度いもの。」と同意す

る。生年十三の乙若は、やたら之を遮さへぎつて、「あゝ臍ふが甲斐もない言ひぐさである。我家に生るゝ者は、幼しとも心強こゝろつよきためしなるに、不覺ふかくな事を申さるゝ。道理だうりを辨へ、身の行末を思ふ程ならば、七十になる父上の、病の上、出家までして、憑り来るを、斬ることの出来る筈はずなきに、斬り給ひし程の人でなし。いかで吾々を助け給ふべきぞ。あゝ情なさけない頭の殿よ。これは清盛が細工であらう。多くの弟どもを失はせ、只一人にし、何事かの宛手ついでに滅ほろぼさうと計らひなるを曉さとらでか。やがては殿が身も、失うしなはれ給ふが悲しい。二三年を経るまでもなく幼かりしも乙若おとわかが、船岡山で言つた言の葉を、延景、そち等も思ひ合はす折せがあらうぞ。思へば、下野殿討るゝ後、源氏の跡の絶え失するが悲しうてならぬ。」とて、三人の弟達おとうとたちにも、「歎なげくなよ、父上も討たれ給うた。兄上達も斬られなされた。誰たれあつて吾等われらを助けようぞ。せめてよるべの頭の殿は敵なり、また命いのちを繋つなぐ領地もあるまじ。愁こゝろ、命助かつて、乞食流浪こじきりゆうろうの身となり、此處彼處こゝかしこにさまよひ、爲義入道たのよしにふじが子供よと、指ゆびさるゝは源氏の恥辱ちじよく。父上戀しくば、只、西

に向うて、『南無阿彌陀佛』と唱へ、西方極樂に往生し、父御前と一つ蓮に生れ合はうと思はれよ』と、おとなしやかに諭せば、三人の弟達は、各々西に向うて小さな手を合せ、禮拜する様、たとへやうもなく可憐い。之を見た五十餘人の兵士、皆袖を濡らしたのである。

此公達には、豫れてより一人宛の傳がつけてあつた。内記の平太は天王のめのと、吉田の次郎は龜若に、佐野の源八は鶴若、原の後藤次は乙若のである。何れも幼主に差し寄つて、髪を結び上げ、汗を拭ひやりなどしたが、年來明け暮れ側仕へして、大切に育て申した方々は、只今が此世の限りであると、思ひやる心の内は身も世もない。されば、大聲放つて泣きたけれど、幼い方々を泣かせまいと、抑へとめる袖にも涙は洩れ、押しつゝまうとする切なさも顔にあらはれる。乙岩は、延景に向つて、『我れ先づ眞先きにと思ふも、あれ等が稚心にもしおち恐れることあつては、不憫でもあり、また、云ふ事もあるにより、あれ等が先きにしよう。』と云へば、秦野の次郎、太刀を抜いて後ろに廻る。傳

もは、『御目を塞ぎ遊ばせ。』と云ひすて、後ろに向く。三人の首はやがて前に落ちた。乙若、之を見て少しも騒がず、『見事にやつてくれた。我をも斯様に斬れよ。あれを持って。』とあるまゝに、行器(首を入れる器)を進めた。手づから弟共の首の血を押し拭ひ、髪を搔き撫で、『あゝ氣の毒な者共、いかに果報少く生れたのであらう。只今死ぬ苦しさより、母上がお聞きになり、歎き給ふ御心を思へば遣る瀧ない思ひがする。乙若は、命を惜んで、後に斬られたと云ふも知れぬど、其譯ではない。我が斬らるゝを見るにつけ、今云ふ事を聞くにつけ、幼い者が泣き出さうことが心苦しく、これまで云はなかつた。母様が今朝八幡へ御参りの砌、『我も参らう』と云へば、皆が参らうと云ひ出す。『連れるなら皆、連れれば皆つれぬ。』とて、我等の寝て居る内に詣でなされた。歸つて尋ね給ふであらう。我等斯くとも知られば、思ふ事をも申し遣さず、形見も進ませず、入道殿の御召しとあるが一圖にうれしく、急いで輿に乗つた次第。されば、之を形見に献れよ』と云つて、弟達の額髪を截り、我髪も切り、間違ひて

はならぬとて、各つゝみ別けて名を記し、秦野の次郎に渡した。「又言葉では『今朝御伴に参つたならいつかは斬られる際、最期の様を御覽に入れ、また御目にもかゝつて、互に心苦しくあらうに、御留守に別れ申したは、却つて幸に存ずる。十年餘りの間、苟にも離れた事は無かつたに、最期の時、御目にかゝられば、御残り惜しういらせられませうなれど、これも八幡様の御計らひと思召し、御歎き下さるな。親子は一世の契りと申し乍ら、來世は必ず同じ蓮に参り合ひます様、御念佛下さい。』と申しなさい。今はこれ等が待遠であらう、さ、早く〜。』と、三人の死骸の中に分け入り、西に向うて、念佛三十遍ばかり唱へると、無慙や首は前に落ちた。こらへに堪へて居た四人の傳は、急ぎ走り寄り、首のない骸を抱き、天を仰ぎ、地に伏して泣き叫ぶも無理ならぬことである。内記の平太は、直垂の紐を解き、天王が體を我が膚に押しあて、「此君に御つき申してより、一日片時離れまゐらすことはなく、我が身の老いるも思はず早く大きく成り給へと、明け暮ればぐゝみ、月日のごと仰ぎしに、只今、此有

様を見る悲しさ。いつも、我が膝の上で、平太が髭を撫で、「ふらくなつて、國も得、莊も得て、とらすぞよ』と宣ひ、うたゝ寢の寢覺にも、たゞもう『内記々々』と御呼びの聲、耳底に留まり、只今の御姿が目について、とても忘れさうには思はれぬ。これから生き存へたとて、千萬年の壽命あることか。死出の山路・三途の河、誰が道しるべ申さうぞ。恐いと思はずにつけても、先づ内記を御尋ねなさう。こんな思も苦しいまゝ、御主の御供仕らう。』と、言ひも終らず、腰の刀を抜いて、腹掻き切つて死んだ。其他の附きの者共も、皆同じ主思ひで、主人の後を追うて刺し違へて失せた。餘りに父を戀しがつたとて、圓覺寺へ送り、入道の墓の傍に埋めたのである。

爲義の北の方入水 さて、かの秦野の次郎は、其後、六條堀河へ参つたけれど、母はまだ御歸りが無い。そこで、八幡の方へ馳せて行く途中で漸く出遭はした。延景、馬から飛び下り、輿の轆に取り縋れば、輿は留まる。秦野、判官出家のことより、七條朱雀で失はれしこと、五人の御曹司は昨日、六條の四人



の公達きんだつは只今、船岡山で失ひ奉つた一分始終ぶんしじゆうを、残りなく物語り、乙若最期の形見かたみを進まらせる。母は之を聞き、餘りの意外いひわいに打ち驚いて絶え入つた。暫しばくたつて、漸く少し人心地ひんしんちがつくと、「夢であるか現であるか。今朝、八幡へ参つても、判官殿はんぐわんだんや子供のため、氏神故に、憑たのみを懸かけに参りしものを、神ならぬ身の悲しさよ。かくと知らば、何の参詣さんけい致すべき。今朝しもあれ等が姿すがたを、今一目見ざりし悔くやしさ。昨夜、あれ等が、我れもくと願ねがふをば、色々にすかし、寢入りし間に、賢顔かしこぶらに出かけし故、歸らば定めし恨うらまれうす、さて何と答へようといまの今まで思ひしぞよ。せめて一人も連れたらば、今なほ茲こゝに居ようもの。せめては子等と諸共もろもろに、船岡とかへ行き、共に何ともなりしならば、かほど悲しい思ひはすまいに。」と、悲歎ひたんにくるゝも痛いたましく、かくて其儘そのまゝまた絶え入つてしまつた。さり乍ら、定まつた壽命じゆまいとて、また息を吹きかへしたものの、此末このすえ何を樂たのしみに暮らすべき。判官の斬られし、同じ野末の露つゆと消えしめよと歎なげき與こより走り出で、身を投げようとする。延景並びに腰元こしもとの女房共にようぼうは、様々に

なだめ、今命いまのちを捨てようより、様かへて、一筋すぢに亡き人々の跡あと巾きんふが肝心である。かゝればこそ、香烟かうそんの中に姿を見、幻まぼろしの便たよりに聲を聞くと云ふためしもある。た、慰なぐさめれば、それも道理だうりなれど、様を替へれば落人おちうぢの妻ときまつた事。さすれば誰れの妻といふ事はかくしだても叶かなはず。兎角とかくの事を云はるゝが恥はづかしく「其上そのうへ、人は一日一夜に八億四千の思ひありとの教へ、憂うれなき世の並の人すらかほどの罪なみだある習なまじなれば、我身わがみたとへ出家しゆつげすとも、老い人を見れば入道殿にやだんのの齡を思ひ、幼せまい者を見る時は、我子わがこもかほどになるであらうにと思ひ浮かべて事毎ことごとに、斬らせし人も恨うらめしく、斬つた者も情なく思はれて心憂こころい。かくては念佛も申されぬ。願ねがはくば同じ旅路たびぢを。」と歎なげくを、様々と慰なぐさめれば、「さらば、せめて七條朱雀しちじょうしゆくわを見よう。」との事に、皆々喜よろこんで、其處へ輿こしを据すゑたけれど、何の名残りも留とどまつて居ゐらない。「さらば、船岡へ。」とあるので、北山きたやまさして行く内に、五條の末程すゑほどの處、岸高くして水深みづかげなる處に輿こしを止めさせ、石いで塔たを積み、入道にやだう及び四人の子供のために、廻めぐりして其石いを懷ふかや袂たもとに入れ、何氣な

き體。猶も、石塔を積み給ふかと思つたに、何事ぞ、岸より身を躍らして、忽ち奈落の鬼となつてしまつた。乳母の女房も之を見、續いて河に投じた。蓋し入道の失せし跡へ行つて見ても、何の見えるものもなく、何の聞えるものもない。船岡へ行つたとて、同じことに相違ない。豫れて觀音に願をかけ、毎日普門品三十三卷・彌陀の名號一萬遍唱へるが例であるに、物詣での爲め今日はまだ其業を果されど、家に歸つても、子供の玩具など見るにつけ、心亂れて勤まるまいから、今日を満願として、茲に敢なくならうと決心したのである。供の者は周章で騒いだけれど、石の重みで直ぐに沈み、程經て探し出し、其夜、鳥部山の烟となし、遺骨は云ふまでもなく、圓覺寺に藏めた。

斯くの如くにして、今朝は船岡山で主従十人、朝の露と消え、今宵は桂河で二人の女房が、夕の烟と立ち昇つてしまつた。

左府の死骸實檢

以上で、爲朝を除いた一族の末路は述べつくした。さらに

ても、新院はじめ、左大臣頼長の一族は、其後如何に成行いたであらう。廿一日の午の刻頃、瀧口三人、官使一人、大臣の死骸實檢として南都へ赴き、添上郡河上村、般若野なる左府の墓を發き、實檢の後、其儘道の邊に打ち捨てて歸つた。翌二十二日、左大臣の公達、嫡男右大將兼長・次男中納言師長・三男左中將隆長・四男範長禪師の四人は、祖父大相國に對ひ、父を失うて懸りない事。父の罪重きにより、子供等も皆死罪に行はれやうといふ事。出家して父の菩提を弔ひ度いと云ふ事。父の死骸が路頭に捨てられ、人に合はす顔もない事などを歎いた。此れに對して、定實相國は、世の中は明日の事がわからぬ。其わからぬ事が頼もしいことであるから、父の跡をつぎかねぬとも限らぬ事。死罪までにはなるまいといふ事。などを云ひ聞かせて慰める。孫達も此意に背くも不孝と思つたのであらう、別に出家することもなかつた。

新院讚岐に遷幸並に重仁親王の事

同二十二日、藏人左少辨資長は、綸言を奉じて仁和寺へ參り、明二十三日、新院を讚岐の國へ遷し奉る由を申上げた。

院も早晚都を去らねばならぬ事は、うすく聞こし召されたけれど、まさか  
今日明日とは思ひかけなかつたに、餘り俄かな事なので、御心細く思し召され  
たのであらう、次の如く遊ばされた。

都には今宵ばかりそ住の江の、きし道おりぬいかで罪見し。

同時に、重仁親王も、花藏院の僧正寛曉に御預けになり、落飾せしめられた。  
明くる二十三日の拂曉に、院は仁和寺を御出ましになる。佐渡の式部の大輔重  
成等が、御車を差し寄せると、やがて院は御召しになる。女房達は悲しんで泣  
き沈んだ。何時もの御幸には、庇の車に召し、公卿・殿上人は庭に下り立ち、  
隨身・官人は前後左右に付き従ふ例なるに、今日は其儀もなければ、泣き悲し  
むも最もである。途中故院の御墓に詣で、御暇申上げたいとの仰せなれど、そ  
れも叶はず。僅かに其方向を遙拜して、御過ぎになる。草津に到つて、國司季  
行が御船に乗せ奉り、重成は此處で御別れ申した。船の屋形には外から錠をお  
ろし、月日の光も御覽ぜず、烈しい風・荒い波の音のみ聞える。須磨の關では

行平中納言の近流を思ひ、淡路島を望んでは、大炊の廢帝を忍び給ひ、都に殘  
りし人の上を思ひやりつゝ、其内に船は讃岐に着いた。御所はまだ出來て居ら  
ぬので、松山と云ふ處の、とある堂に入れ奉つた。事に觸れては、都戀しく思  
召し、

濱千鳥跡は都にかよへども、身は松山にねをのみぞなく。

と、御詠みになつた。

新院御出ましのあとに、都では、源平合戦の風説が立つたり、院の手箱から、  
重祚に關する密書があらはれたりなどしたが、騒亂は意外に早く治まつて、人  
民もやゝ安堵の思をした。

抑も此度の渦亂の源を鑿ふるに、苟も帝王たるべき者は、天地仁義に合し、世  
の治亂に鑿み、貪欲なく邪見なく、一切を憐んで十善を行ひ、聊も私心なく天  
下を治むべきであるに、愛子に溺れて庶を立て、后妃に迷うて弟を用ゐるなど  
の事を遊ばされたが、即ち國の亂れる基であつた。話は少し岐路に入るが、昔、

支那の齊の國に、無鹽と云ふ婦人があつた。世に稀れな醜婦で、三十になつても娶るものがない。或る時、時の王宣王の宮に詣で、后妃の數に加へられたいと願うた。宣王は酒肴を設けて引見なさる。左右の者は、口を掩ひ目を引いて笑ふ。婦人はやがて、胸を打つて、「危い哉」と四度云つた。宣王、之を聞いて其故を問ふと、外には三國の難があり、内には姦臣が聚まつて居る。これ其一。宮殿の建築・裝飾に天下の富をつくし、人民は疲れて居る。これ其二。賢者は山に隠れ、佞臣左右にあつて、諫め諭す者もない。これ其三。酒を嗜み、女に溺れ、従つて、國家の治を思はず、諸侯も禮をつくさぬ。これ其四。臆面もなく述べると、宣王は蹶然として悟り、悉く諸弊を改め、宮女を放ち、無鹽を入れて皇后とした。齊國は爲めに大いに安らかになつたと云ふことである。然るに、今は只顔色を愛し、寵愛を前として、後宮亦少なからざるが故に、國が亂れるのである。周の幽王の褒姒に於けるも同様な例で、鳥羽の院は、美福門院の計を容れ、新院を下ろして近衛院を位につけ、嫡孫を擱いて第

四の宮を立てさせられたから、此亂も生じたのである。然し乍ら、我國は天照大神以來、帝位を窺ふ者の、亡びざる例はない。

## 左府の君達及謀叛人各遠流

廿五日には、其他の人々を諸國に流す旨の宣下

があつた。即ち、左京の大夫教長は常陸に、近江の中將成雅は越後、盛憲入道は佐渡、正弘入道は陸奥の國と云ふ事である。左大臣の四人の子供も、亦此數に洩れず、兼長は出雲へ、師長は土佐に、範長は安藝と定まつた。八月二日に、兼長以下は、南都を出で、山城の稻八間と云ふ處に移り、それから各配所に赴いた。師長は琵琶の名人である。大物と云ふ處へ着いた時、日頃琵琶を習つて居た、源惟守といふ者が、最後の送りとして此處まで來たのであるが、終夜秘曲を調べて名残を惜んだ。師長は此厚い情にいたく感じて、青海波の秘曲を授け、其譜の奥に、かう書かれた。

教へおくその言の葉を忘るなよ、身は青海の波にしづむと。

惟守は、袖をひろげて押し戴き、涙に咽んで立つた。此外、諸國に流さるゝも

の十四人と聞えた。

大相國上洛

忠實禪閣は、

四人の孫にさへ別れて、悲歎の涙にくれ、なまじ

死んだがましとまでも思へど、それも叶はぬ。八月八日、富家殿へ歸り住み

度い由を内々願ひ出で見たが御許しがない。剩へ配所へ遣はすとの事である。

信西、關白殿へ此旨を申出ると、父を配所へ遣はし、何の面目あつて攝政をし

て居られようとの事である。信西は其由を奏聞した。關白の此志を聞いて、日

頃快からず思つて居たことを忠實は後悔した。關白から南都へ迎へに遣はさ

れたけれど、病氣とて來ず、後、知足院に住むこととなつた。

新院 經沈め及び崩御

新院の讚岐へ御着きになつたのは八月十日。始め

松山に御出でになつたが、やがて直島といふ處に御所が出来、それへ御遷り

になつた。四方垣を築いて、只一口だけ開き、三度の供御をまゐらす外、訪ひ

奉る者もなく、折から秋も闌け行いて、松が枝拂ふ嵐の音、叢に弱る虫のねも

心細く、夜の雁の遙かに海を渡るにつけては、都へ言傳て度く、曉の千鳥の洲

崎に騒ぐを聞いては、御心を碎く種となる。過ぎにしことを思ひめぐらせば、

三十八年宛ら昨日の夢である。如何なる宿業によつて、かゝる憂き目を見るの

であらう。たとひ、鳥の頭白くなるとても、歸京の期のあるべくもなく、定め

し、此儘望郷の鬼となり果てるのであらう。かゝ御思ひになり、せめては後世

の爲めにもと、思ひ立つて、五部の人乗經を御自筆あそばした。かほどのも

のを、梵鐘の音も聞えぬ處に置くも情ないにつき、八幡山か高野山か、もし御

免るしあらば鳥羽安樂壽院なる故院の御墓所に奉りたい趣を御伺ひになつたが

御勅許なく、御經はかへし遣はされ、剩さへ、御手跡は都近くに置くことも叶

はぬとの御返事がある。院は失望と憤志とに満たされたのである。過去の悪心

懺悔のために書いて奉るのである。然るに筆跡をさへ都に置かねとは、餘りと

云ふも愚かであると憤り、此經を冤道に廻向し、以つて遺恨を晴らさうと仰せ

て、千尋の海底に御沈めになつた。其後は、御爪を長くし、御髪も剃り給はず

御姿衰れ給うて、見るも恐ばさうな御様子であつたが、九年の後、長寛二年八

月二十六日、御歳四十六歳、志度と云ふ處で崩御になり、白峰と云ふ處に葬つた。此君、怨念によつて、生き乍ら天狗の姿に、おなりになつたと云ふ事であるが、その故か否か、平治元年十二月、信賴・義朝は、信西一類を亡ぼし、義朝はまた、平氏に滅ぼされ、乙若が豫言は、掌を指す如くに適中した。後、仁安三年冬の頃、西行法師は、西國の歌枕もとめるついでに、白峰の御陵に参つて、つくぐと昔の事を思ひ浮べ、

よしや君昔の玉の床とて、かゝらん後は何にかはせん。

と、詠んで奉つた。保元三年八月二十三日に、後白河帝は、春宮に御讓位あり即ち、二條の院と申上げる。治承元年七月二十九日、讃岐院に御追號あつて、崇徳院と申し上げる。かくても、御憤り時れざりしと見え、治承三年十一月には清盛が横暴、同人の發病等の事が引きつゝいて起つた。何れも讃岐の院の怨靈の業であるといふ取沙汰で、茲に、其昔、合戦のあつた御所の跡に、社を造つて崇徳院とあがめ、又、左大臣にも贈官・贈位を行はせられた。

爲朝生捕の上遠流

行方不明の爲朝が事は、未だ絶えて云はなかつた。今それを云はねばならぬ。早き以前に、彼れを搦め捕つた者には、非常の恩賞を賜はる旨の宣旨が下つて居たのである。爲朝は近江の國、輪田といふ處に隠れて居て、やがて筑紫へ下る考であつたが、平家の侍、筑後の守家貞が、大勢を率ゐて向つて來たと云ふので、晝は山にかくれて居たけれど、其内に病氣にかゝり止むを得ず、里へ出で、湯屋を借りて湯をつかつて居る内、佐渡の兵衛重貞といふ者、端なくも此事を聞きつけ、九月二日湯に入つて居る所へ、三十餘騎で押し寄せ、爲朝、眞裸體で、棒を取つて數多の者を打ち伏せたけれど、大勢に取りこめられて、搦め捕られた。判官季實之を請取り、北の陣で觀覽がある。白い水干袴に、赤い帷子を着、髻に白櫛を指して居た。公卿・殿上人は申すに及ばず、其他見物の者は人山をなして居る。額に創がある。これは、合戦の日鎌田正清に射られたのだといふ事。當然誅せらるべき者なれど、時期も過ぎ、

且つは得難い勇士といふ譯から、流罪と定められた。但し此儘では後難の恐れありとて、肘の筋を抜いて、伊豆の大島へ流された。爲朝は、これこそ、上より賜はつた領地であると、大島は勿論、五島凡てを討ち従へ、島の代官、三郎大夫忠重といふ者の婿になり、我が郎等の外には、島中皆弓矢を取上げ、勢、日と共に盛んに、凡そ十年を経過した。

爲朝鬼が島わたり並に最期 其内、永萬元年三月、磯へ出て遊んで居ると白鷺と青鷺とが沖の方へ飛び行くを見、遠からぬ處に島があるに相違なしと思ひ、早船に乗つて、追うて行つた。日も暮れて、月明りに島影が見える。岩岨しくして船をつける處もない。漸く島に上つて見ると、身の丈々餘、全身に毛生え、黒牛の如き大童が、刀を右に指して、澤山出て来る。詞は固より通じないが、手眞似足眞似で聞いて見ると、此島には悪風が吹いて、生きて還るものはなく、食物もなければ死ぬに定まつて居るから、早く還るがよいと云ふのである。爲朝は少しも騒がず、島を廻つて見ると、田も畑も、菓物もない。何を

食へて生きて居るかと問へば、魚と鳥とで、それも波に打ちあげらるゝを拾ひ穴に入り来るを捕へるのであるとの事。爲朝は、空翔ける鳥を射落して、従はぬと此通りにすると云へば、皆平伏する。島の名を問へば、鬼が島といふさうである。此島には、葦が多く生えて居たから、葦島と命名し、年一回の年貢を命じて歸つた。然るに、高倉院の嘉應二年、狩野の介と云ふ者が、爲朝狼籍の事を奏聞すると、後白河院は御驚きになり、嘉應二年四月末、討手の勢、五百餘騎、を兵船二十餘艘で差し向けられた。爲朝は、たとひ一萬騎たりとも、打ち破らうと思へば、出来ぬこともなければ、多くの兵を損し、人民を惱ますも不憚、又勅命に背いても何の益もないと思つた。九國及源平の兵で、彼れの弓勢を知らぬものはなく、従つて彼に對して弓ひく者のある筈なきに、都よりの大將ならば、へば平家位のもの、皆射洗めやうかとも思へど、無益の罪をつくるも詮なしと思ひかへし、郎等には形見を與へて、落ちのびさせ、子の爲頼とて九歳になるを刺し殺した。外に五歳の男子と、二歳の女子とは母が抱いて逃げ

てしまつた。爲朝は、最後の矢を手弱く射るも無念と思ふ處へ、一陣の船に、兵三百餘人、沖合三町計の處へ押しよせた。矢頃は少し遠けれども、大鎗矢を番へ、引き詰めて、勢よく引き放つと、水際五寸許下つて、大船の腹を向ふ舷まで射透した。水は其穴から浸入して、またたく内に水底に沈む。南無阿彌陀佛」と唱へ、内に入り、家の柱に背を當て、腹掻き切り、斯くの如くにして失せたのである。官軍は怖ぢ乍ら、漸く島に上つたが、只外郭ばかり取巻いて家の中へ入るものがない。加藤次景廉と云ふもの、自害したと見極はめて、長刀で以て後ろから首を打ち落し、其首を、都へ上せて觀覽に供した。十三で筑紫へ下つて九國を従へ、十八で保元の合戦に名を顯はし、二十九歳で鬼島へ渡り、三十三歳で勇名を天下に轟かした血氣の勇士、鎮西八郎源の爲朝が最期は以上の通りである。

終

平治物語

卷一

信賴と信西と不快

三皇五帝が國を治め、國民を撫育して、安らかであつたのは、人物を見て官に任じ、官に擧げられるものも、我身を顧みて、祿を受けたからである。此くの如くすれば、任をつくし功を收める事が出来、従つて、天下は勞せずして治まる。舟航に楫楫、翱翔に羽翼の用ある如く、帝王の國を治めるは、一に良弼の助によるのである。人臣の君に對するにも、文武二道あつて、文は萬機の政を輔け、武は内外の亂を夷けるにある。此文と武とは、人の兩手の如く、何れの一方でも缺けてはならぬ。又、世の王者たる者は、右の理を承知し、勇士は須らく賞し、讒奸の徒は、用捨なく退ければならぬ。茲に、權中納言、兼、中宮の權の太夫、右衛門の督、藤原の朝臣信賴卿といふ人があつた。天津兒屋根命の裔、關白道隆より八代、三位忠隆の子であるが、



文武何れの藝能もない。父は漸く從三位にしか昇れなかつたに、信賴は近衛の司・藏人の頭・皇后宮の司・參議中將等を、僅か二三年の内に經昇り、二十七歳にして中納言右衛門の督に至り、殆んど前例なき昇進なれど、猶足れりとせず、大臣の大將といふ分外の位置を望み、彼の微子瑕・安祿山にも起えた榮華の恩寵に誇つて居た。

其頃、少納言入道信西と云ふ者があつた。俗名通憲と云つて、山の井三位永賴卿六代の後胤、文章博士實兼が子で、學問の家に生れただけに、諸學に味くない。後白河上皇の御乳母、紀伊の二位の夫である所から、保元元年以來、天下の大小事を心のまゝに執り行つて、絶えし跡、廢れし道を興こし、殊に、久しく修造なかりし大内の荒れはてしを造營し、大極殿以下諸司八省、年を経ずして成りしも、國も民も何等の煩を蒙らず、至て穩かである。保元三年八月十一日主上は御位を二條の院に御譲りになつたが、信西が權威は益々盛んで、方に飛ぶ鳥を落す勢である。

又、一方、信賴卿の寵愛も頗々深く、實に廟堂肩を双ふる者もない有様。由來兩雄は相争ふ習なる上、如何なる天覺が二人の心に魅入つたのであらう、中惡しく、常に互に面白ろからずおもつて居た。或時、上皇は信西に向ひ、「信賴が大將を望むが如何にしたものであらう。大臣の家柄ではなけれど、場合によつてはなされた例もあると、聞き及んで居る」と、御問ひになると、信西は、信賴如きは到底大臣の器にあらざること、もし彼れ如き者が、大將を汚がしたならば、叙位任官のことが、不公平になり行き、且つは驕慢の果て、謀逆の臣となるに相違ない旨を、奏上したけれど、陛下には、成程と思召す御様子もない。それ故、信西は、唐の安祿山の繪卷物を、三卷描いて奉つたが、なほも思召しやみさうにもない。信賴卿は、後に此話を洩れ聞いて、不安に思ひ、病氣と稱して出仕もせず、只管馬術・武藝の稽古に餘念がない。蓋し信西を失はうが爲めの稽古といふ事である。

信賴謀叛

始め、信賴は、子息の信親を清盛の婚にして、近づき語らばうと

思ふたけれど、彼れは過分の朝恩を蒙つて居るから、同意すまじと思ひ、それよりは、保元の亂以後、平家に立ち劣つて、心安からず思つて居る左馬の頭義朝こそ、屈強な者であると思ひ、甘言を以て思ふ事を依頼した。義朝は直ちに承知する。其他、當帝の外戚新大納言經宗・越後の中將成親・御乳母の別當惟方等をも語らうて、隙を伺ひ居る内に、平治元年十二月四日、大貳清盛は、宿願あつて、嫡子重盛を伴ひ、熊野參詣に行くことがあつた。其隙を見て、信賴は義朝を招き、信西が紀伊の二位の夫たるにまかせて種々不都合の行爲あるのを、清盛亦彼れが縁によりて、源氏を亡ぼさうとする底意あることを語り、好機逸すべからずと煽動すれば、義朝は、六孫王以來、武藝の譽高き家柄も、保元以來、義朝一人となりおふせしこと、今更驚くべきでもなければ、折角の依頼もあり、一家の浮沈をも試みようと思ふことになつた。信賴は喜んで、嚴物作の太刀一腰、自ら取り出して進物とし、義朝が謹んで請取り立出ると、黑白二匹の立派な馬に、鏡鞍を置いて引き出した。夜の事ゆゑ、松明振り擧げさせ

て此馬を見、賛嘆惜かす、此龍蹄に跨つては、如何なる強陣をも破るべし。合戦は一に謀にあるも、又小を以ては大に敵せずとも云へばとて、源賴政・同光基・季實等とも喋し合せて歸れば、信賴は、豫れて用意せし、緘し立ての鎧五十領を、直様持たせて遣はした。

院の御所夜討、並に信西が宿所を焼き拂ふ

九日の夜子の刻頃、信賴は、

義朝を大將として軍勢五百餘騎、後白河院の御所なる三條殿に押し寄せ、四方の門を固め、馬上乍らに、年來御寵恩を蒙りしも、信西が讒により、御誅罰あるべき由につき、暫らく命助からんため、東國へ參る旨を申せば、上皇は、「何者か信賴を失ふべき」とて、御驚き一方でない。さり乍ら、源中納言師仲卿、御車を差し寄せ、急ぎ召さるべき由を申上げれば、上皇は、御妹上西門院と御一緒に、遽て御召しになる。信賴・義朝以下、前後左右を打ち圍んで、大内なる一本御書所に押し籠め奉り、やがて、土佐の式部大輔重成・周防の判官季實が、守護し奉つた。此重成は、保元の亂には、讃岐の院を仁和寺に守護し奉

つたのであるが、二君を守護し奉るとは、どう云ふ縁因があつたのであらう。三條御所には、所々に火をかける、猛火忽ち空に充ち、暴風烟雲を捲く勢すさまじい。公卿・殿上人、さては局の女房達まで、信西が一族ならんとて、射伏せ斬り殺す。火に焼けまいとて遁げ出れば矢に中り、矢に中るまいとすれば火に焼ける。何れにしても助からず、結局、井戸へ飛び込むものも多かつた。唐土阿房宮の炎上には、后妃・采女の焼けることはなかつたに、此度の回祿には、月卿・雲客・宮女の論なく、死するもの無数である。左兵衛の尉大江の家仲・右衛門の尉平の康忠等、防ぎ戦うたけれど、終に討たれた。それより、丑の刻には、信西が宿所なる、姉が小路西の洞院へ押し寄せ、又しても火をかければ、女童の迷ひ逃げるのを、もしや信西が様子をかへて逃げるのではないかと、多くの者を斬り伏せた。保元の亂以來、都鄙共に治まり、人民は其堵に安んじて居たに、計らずも今また戦亂の世と化し、軍兵實に京白河に充ちて居る。

〔信西が子息關官、附、除目、並に惡源太上洛〕 信西が子供は、嫡子俊憲以下

五人皆解官せられ、諸大臣以下參内、會議の後、彼等を探れ求めるに、播磨の中將成憲は、清盛の婿故、一命を助かるべく、六波羅へかくれて居たのを、呼び出されて、尋ねべき仔細ありとて、坂上の兼成に預けられ、權の右中辨貞憲は出家してかくれ居たのを、同じく探し出されて、判官信澄に預けられた。やがて除目を行はれ、信賴は望みの通り、大臣の大將に、義朝は播磨の守に、重成は信濃の守に任ぜられ、以下の諸將も夫々官に任ぜられ、又、鎌田の次郎は、兵衛の尉になつて、正家と改名した。爰に、義朝が嫡子、鎌倉なる惡源太義平は、都の急を聞き、馳せ上つたが、除目の間に合うた。信賴、喜んで、「如何なる官祿位階をも望め、又、合戦もよくせよ。」と云へば、義平は、保元の亂に、叔父爲朝が戦に先ち、藏人にされしを辭したは最もであること、直ちに兵を率ゐて清盛が歸途を安部野で一討にすべき計畫、戦もせずして除目にあふのいはれなければ、東國で兵共に呼びならされた通り、元の惡源太で結構である旨等をのべると、信賴は、安部野へ出かける必要なく、都へ取り籠めて討つて十分である

とて、取り上げぬ。此度の戦に、多くの人命を失うたものだから、人を多く殺して官位を得られるものなら、三條殿の井戸には、なぜ、官位を下されぬぞ悪口いふものもあつた。

信西出家の由來、並に南都落、及び其最期  
 信西入道も頼りに探すけれど行方がわからぬ。爰に、宛手を以て、彼れが入道と稱へられるいはれを少しく物語らねばならぬ。彼れは、藤原南家、長門の守高階經敏が子供分で、云ふ程の手柄もなく、さしたる官位にもありつかなかつた。或日のこと、御所へ参らうとて、鬢を搔くとき、其鬢水に顔をうつすと、喉笛一寸許の處が、劍の尖にかゝつて死ぬといふ人相がうつて居る。其後、熊野参詣のとき、切目王子の前で、人相見に遇ふと、矢張同じことをいふ。どうしたらば此難をのがれることが出来ようと問へば、出家する外に道はなく、それすら七十歳になればあてにならぬと答へた。そこで歸還後、出家するにつき、せめて少納言を賜はりたいと願ひ、漸く許されて、墨染の袖に姿をかへたのである。それでも露命は旦夕

に迫まつて來た。信西は九日の晝、白虹日を貫くといふ天變を見て、今夜御所へ夜討が入るといふことを知り、ひそかに院の御所へも申上げ、自らは、侍四人を従へ、月毛の駒に乗つて、南都をさして落ちて行つた。途中又不思議を見、十日の朝、人を遣はして都の有様を見しめると、前述の如き騒亂である。そこで、宇治の奥、大道寺といふ領地へ行つて、侍共に深い穴を掘らせ、四方に板を立てならべ、節ぬいた竹を通して口にあて、隠れて居、侍共は都へかへした。

信西が首實檢、後獄門に梟けらる  
 其内の一人が、最後の乗馬を曳いて、木幡山まで來ると、出雲の前司光保が五十騎許を率ゐて、信西を探すに出遇はした。人も馬も見知られて居るので、捕へられ遂に白狀したので、此男を案内として行くと、土を掘つた處がある。掘りおこして見れば、信西は目をばちくりして居る。忽ち首を取つてかへつた。十四日に信賴が首實檢をなし十五日に獄門にかけると、京中の上下貴賤は、河原に市をなして集まり、保元の亂に、絶えて久しき死罪を發議した報であるなど云ひ合つて居る。君に分

れ、夫に後れ、如何になり行くかわからぬ子供の身の上を氣遣うて、紀伊の二位は、獨り悲しい思をして居る。

唐僧來朝の話

紀伊の二位は、右馬の頭範國の女で、八十島祭に隨行の際三位に叙せられ、やがて從二位になつたのである。信西の妻となつてから、夫の身に色々な不思議があつた中に、唐僧が信西をば、「生身の觀音だ」と驚いたこともあつた。それは久壽二年、鳥羽上皇が熊野へ御參詣の折のこと、那智山に居た唐僧を御召しになつたが、言葉通ぜず、應答する者が無い。末座に居た信西が此僧と、支那・天然・高麗のことなど問答して、博學を示した。所が、彼僧は「生身の觀音である」といつて、三度禮拜したといふ事である。

叡山物語

又、こんなこともある。保元元年の春、同じ上皇が、比叡山へ行幸になつたとき隨行し、傳教大師修行の道具につき、一々説明して、法皇並びに叡山の僧徒をして、其博學に舌を捲かせた。斯くの如き人も、勅諭にもあらぬ獄門にかけられるといふあはれな最期をとげたも、保元の亂後、左大臣の

墓を掘り開いて、骸を恥かしめた報であるとも云はれた。

六波羅より早馬を紀州に立てらる

西信は滅びた。清盛は、熊野へ參詣の途上、切目の宿へついた時、六波羅の邸から差し立てた早馬に接し、此變事を詳しく聞いた。都の急も大事である、こゝまで来て、「參詣を遂げぬも無念である。如何にしたもの」と案じ煩へば、佐衛門の佐重盛は、「參詣とても畢竟は、現當安穩を祈願するに外ならず。まして、君逆臣に取り籠められ給ひしとありては、武臣として一刻も猶豫すべき時期でない。」と論じ、直様引きかへすことにきまる。それにしても、參詣のことよて淨衣のまゝ、一領の鎧もない。困つて居る時、筑後の守家貞が、長櫃五十棹に、五十人前の鎧や武器を運んで来て、立所に五十騎が出来る。他に、附近で募つた者を合せて百騎許は出来た。然れども、悪源太義平が、三千餘騎を從へて、安長野に待つてるとの事。多勢に無勢、とても話にならぬ。清盛は、「四國へ廻つて後、都へ入らうか。」と云へば、重盛は、「そんな手ぬるい事をして居る内には、諸國へ院宣・繪旨が下つて、平氏は朝敵と見

なされる。小勢なりとも決戦して、叶はずば討死するが、却つて後の響である。との意を重れて述べたので、それにきまる。都をさして急ぐ内に、鬼の中山で大急ぎで向うて来る騎者がある。それ悪源太が使かと色を失ふ内に、近づいて見れば、六波羅からの早馬である。聞いて見ると、昨日出發したまでには別状なかつたが、只、播摩の中將が逃れて來たのを、内裏から頼りに召されるので十日の暮頃出してやつたといふ。「頼んで來る者を、敵の手へ渡すといふ事があるものか。」と云つて、重盛は憤慨する。又「悪源太が安部野に居るとの事は、どんな様子か。」と問へば「そんなものは見えぬが、身方の兵が三百餘騎待つて居る。」といふので、心配は忽ち喜びとなり、皆、元氣づいて進む内に、和泉の國大島の宮に着いた。重盛は、秘藏の飛鹿毛といふ馬に、銀覆輪の鞍置いて、神馬に奉れば、清盛は

かひこそよ歸りはてなば飛びかけり、育み立てよ大鳥の神。  
と詠んで奉つた。

「光頼卿參内、及び、許由の話、並に清盛熊野路より歸洛」同じく十九日には、公卿僉議と云つて、諸大臣及三位以上の會議が内裏で開かれた。勸修寺の左衛門の督光頼卿は、信頼にとつて母方の叔父で、日頃恐れをなして居る人である。近頃の信頼が振舞過分であると思ひ居る矢先なので、參内して様子を見ようと思ひ、殊に鮮やかに束帶し、蒔繪の細太刀を悠然と佩き、乳母子の籠籠といふ者に、膚に腹巻を着せ、雑色の様にいでたさせ、「萬一の事もあらば、人手にかけて、其手にかけて、光頼が首をとれ。」と言ひ含め、外に雑色四五人召しつれ、厳しく守護せる門を物ともせず、威風堂々と入ると、兵共は恐れ小さくなつて通し申した。紫宸殿の後から、殿上を廻れば、信頼上席につき、他は皆下座に列つて居る。光頼卿は、「人は兎も角、彼れは右衛門の督、我れは左衛門の督、下にはつくまい。」と思ひ定め、しづくと歩んで、信頼の上席にむづとつかれた。信頼は色を失つた。やがて、光頼卿は、衣紋を繕ひ、笏取り直し、むづとして、「今日は、右衛門の督が上席と見える。御召しに參じないものは、

死罪しざいに行ふとか承つて参つた。何の御誼ごぎでありまするぞ。」と問うても、信賴のぶより返事へんじもない。他の公卿くぎやうも同様である。まして會議ぎぎはありさうにもないので、程ほど經て、光賴卿は、「つまらぬ處へ参つた。」と云つて、靜かに去られた。庭上に充ちし兵共は、此體このていを見、光賴を賛嘆さんたんして、「此人を大將として戰つたら、どんにたのもしからう。」と、云ふものがあれば、又、「昔、賴光・賴信と云ふ源氏の名將があつたが、賴光をさかさに、光賴を名乗り給ふから剛い。」といふのもあり、又傍かたはらから、「其賴信を逆にした信賴は、なぜまたあんなに臆病おびやうなのだらう。」と訝あやがる。聞くものは、「壁に耳・天に口」と云つて、恐れ乍らも忍び笑うた。光賴卿は、敢へて急ぎ出るでもない。殿上の小部こぶの前、見參の板を、高らかに踏み鳴らして行き乍ら、荒海の障子の北、萩の戸の邊に、弟の惟方これかた別當の居たのを招きよせて、「公卿會議とあるによりて参つたれど、其様子もない。光賴も死罪に行はれる其人數の中とは誠か。傳へ聞く如くんば、其人々は皆當今の摺紳、然るべき人達である。其中に入れらるゝ事は光賴甚だ面目である。」などのべて、

更らに、惟方これかたが先日、信賴の車の尻に乗つて、信西が首實檢に行つた不心得ふこころを責め、讒奸ざんかんの徒に與あすることは、累代るゐだいの佳名を失ふ一大恥辱たいちじよくであると教へ、源平の大勢たいせい推知するに難かられど、萬一の場合もあらば、必ず、玉體ぎよくたい恙あやなからん様に注意せよと命じ、「主上は何處に御座しますか。」と問へば、惟方これかた、「黒戸の御所に。」上皇は、「一本御書所に。」内侍所は、「溫明殿に。」劍璽けんじは、「夜の殿に。」と、かう、問ひ詰める、答へるして居る折柄、朝餉あさぐれひの間の方に人の音がし、櫛形くしがたの穴に人影がさすので、「何者か。」と問ふと、「朝餉には信賴が住んで居るから、其女房達の影でもさしたのであらう。」との答。光賴卿は、「世も末である。」と長大息し、「主上の渡らせらるべき朝餉には、信賴住み、君をば、黒戸の御所に遷しまゐらすとは、何事であらう。世は末代乍ら、日月未だ地にも落ちぬに、天照大神・正八幡宮は、如何に王法を御守りなさるぞ。異國は知らず、我朝わがてうにおいては、前代未聞の珍事ちんじである。」と、忌はしげに、憚る所なく云ひ放てば、惟方これかたは、興きようさめ顔に立ち去つたが、光賴卿は、「何の宿業しゆくごふによつて

此様な世に生れ合せ、汚はしい事を見もし聞くのであらう。昔の許由なられど、耳をも目をも洗はればならぬ。」と、衣の袖を絞るばかりに、悲しみ泣かれた。許由は、富貴のことを聞いてすら、汚らばしいとて、耳を洗うた。況んや、光頼は朝家の諫臣として、此惡逆無道を見聞きするのである。耳目を洗ひ度く思ふも最も至極である。之れに反して信頼は、小袖に赤い下袴をばき、冠には巾子紙と云ふものを入れて、専ら天子の装をして居る。大貳清盛は、既に、伏見稻荷に参り、杉の枝を鎧の袖にさして、袖標にし、やがて六波羅へついた。大内では、定めし今夜寄せ来るであらうと、兜の緒をしめて待ち明かして居る。

〔信西が子息、遠流に宥めらる〕 夜が明けると、公卿僉識があるとして、關白以下諸大臣・公卿は参内する。豫れて捕はれた信西が子供、僧俗合せて十二人の罪を定めるためである。左大臣伊道公の宥めにより、死一等を減じて、流罪となし、俗は位記を停め、僧は還俗せしめられる。先づ、俊憲の出雲の國を始めとして、下野・隱岐・阿波等の諸國へ流されるに定まつた。

〔後白河の院仁和寺御幸〕 二十三日には、六波羅の軍勢が、内裏へ寄せ來ると云ふ噂で、騒いだけれど、其事もない。茲、十日程の間は、六波羅では大内から寄せ來ると云ひ、大内では六波羅から攻め寄せると云つて、騒ぎ立て、源平兩家の軍兵は、京・白河の聞を往還して居る有様で、年はすでに暮れようとするけれど、年始の支度するものもなく、合戦の噂で持ち切つて居る。二十六日の夜更けてから、右少辨成頼は、一本御書所なる上皇の處へ参り、今夜、夜の明けぬ内に、世は亂るべきにつき、主上は既に、他所へ御幸なつたこと、及び院にも何處ぞへ、急ぎ御幸遊ばさるべきことを奏上すると、御驚きになつて「仁和寺へ。」と仰せになり、殿上人の體に、御姿をやつして御出ましになり、上西門の前で、北野の方を伏し拜み、そこから御馬に召された。御供の者は一人もなければ、馬にまかせて御幸なさるのである。二十日過のことゝて、未だ月も出ず、北山おろしの音牙えて、空かき曇り降る雪に、御道の先も見分け難い。草木のそよぐを、逆徒の追ひ奉るのではないかと、肝を消させ給ふも畏れ



多い。先年、讃岐の院が、如意山に御幸遊ばし、ことも忍ばれる。其時は、家弘・光弘なども侍らうて居たに、此度は、武士一人御供仕るでもない。御心細さのあまり、左の如く一首遊ばされた。

歎きにはいかなる花の咲くやらん、みになりてこそ思ひ知らるれ。

御心細さの内にも、免角して仁和寺へ御着きになつた。五の宮は、御悦びになつて、色々と御もてなしになつた。

主上六波羅へ行幸

主上は、朔平門に御車をよせ、女官の装をして、鬘を御

つけになつた。内侍所及び、寶物を入れた唐櫃を、運び出す所を、鎌田の次郎が郎等に怪まれたけれど、兎に角、出し奉ることが出来た。中宮も、主上と同じ車に御召しになつた。別當惟方、新大納言經宗が、直衣を着、冠に柏挾して御供し、藻壁門から出し奉ると、此處は、金子・平山といふ源氏の郎等が固めて居る。怪まれるので、惟方は、女房達の車であると言ふけれど、金子は猶も怪んで、弓の筈で、簾かきあげ、松明の光で見ると、正しく美しい女である

こんなことで譯もなく、落しまゐらすことが出来た。上東門を通るが早いか、土御門を飛ぶばかりに行幸なされば、土御門東の洞院には、重盛をはじめ、三百餘騎が、御待うけ申して居て、前後を守護して、六波羅へ入れ奉つた。平家の者の喜ぶこと限もない。此處を行在所と定められ、朝敵ならぬ輩は、此處に集れ。しといふ仰せが出ると、關白・諸大臣以下、内裏へ参らうと思つた者は、此由を聞いて、皆、此處へ集まつた。

源氏勢汰へ

かくとも知らぬ信頼は、か程の女事を控へ乍ら、沈酔して、

女房共に、「こゝ打て、かしこを揉め、しと云つた。二十七日の曙に、越後の中将成親が走つて来て、主上も上皇も、既に他へ御幸になつた事を告げると、驚いて諸處を探すけれど正しく御出でにならぬ。信頼は臍を噬むの思をするけれど致し方ない。蓋し日頃信任して居つた惟方と經宗とに出し抜かれたのである。惟方は信頼に親まれて居たけれど、先日、兄光頼卿に誡められて、かくは忠臣の舉動をするに至つた。悪源太義平は、賀茂へ参る途中で此事を聞き、義朝に

問ひ合すと、いそんな噂であるけれど、信賴からは何とも云つて來ない。よしそれにしても、源氏の習として心替りする譯にはゆかぬから。」と云うて、集つた軍勢の名を註させた。大將軍は右衛門の督信賴・子息信親・兄基家以下の公卿若干。源氏一門には、左馬の頭義朝・嫡子義平・次男朝長・三男頼朝・叔父義隆等八人、郎等には、鎌田の次郎を始めとして、武藏・相模・上總・常陸・三河等の住人合せて二千餘騎と註された。信賴其日のいでたちは、赤地の錦の直垂に紫裾濃の鎧を着、金作の太刀を佩き、白星の兜に鍬形打つたのを猪頸にかぶつた有様は、心は知らず、さすがに大將軍と見えた。南部駒の逸物に跨がつて、左近の櫻の下に東向に引き立てた。義朝は、赤地の錦の直垂に、黒絲緘の鎧、鍬形打つた五枚兜の緒をしめ、嚴物作の太刀を佩き、黒羽の矢を負ひ、節巻の弓持つて、黒月毛の馬に黒鞍おいて、日華門の處に控へる。面貌眼光、自ら他に異なつて居る。惡源太は、練色の直垂に入龍といふ鎧を着、高角の兜、石切といふ太刀を佩いて、父に並べば、朝長は、朽葉の直垂に澤湯といふ鎧、

白星の兜、薄緑といふ太刀をばいて、兄の傍に居列ぶ。三男頼朝は、當年十三、紺の直垂に、源太が産衣といふ鎧を着、白星の兜の緒をしめ、髭切といふ太刀を佩いて、栗毛の馬に跨がつて、之れも兄に居列ぶ。源太が産衣といふのは、義家の幼名を源太といひ、二歳のとき院の見参に入れる時、態に緘した鎧で、源氏の重物。又髭切といふは、義家、貞任征伐の時、生捕の者十人を斬るに、髭も共に切れたから附いた名で、これも源氏重代の名刀である。此の如き品は惡源太に傳るべき筈なるに、此度頼朝に授けられたは、後日、源氏の大將となる験でもあつたらう。時は十二月二十七日、辰の刻ばかりのこと、消え残りし雪は、こゝかしこに白く、旭日の光は燦々として、物の具の金物に映じ、凡そ我が朝の武士、此一類にまさるものあるべしと思はれぬ。併し乍ら、一族中頼政・光保・光基は、心替りして既に六波羅に赴いて居るのである。

待賢門の軍、並に信賴歿落一。六波羅の皇居では、公卿僉議あつて、清盛を御召しになり、「王事監き事なし、逆徒滅びん事疑ひなければ、新造の内裏にしてもし回祿の厄にあはんか、天下の一大事ゆゑ、偽り退いて官軍を入れかへ、火災なき様に取計はん。」といふ旨の御詔が下る。清盛は畏つて、逆徒誅戮は掌の内にあれど、祝融の禍は聊か掛念に堪へざる趣を伏奏して退出した。皇居の固めには清盛をとどめられ、大内へ向ふ勢としては、大將軍に左衛門の佐重盛・三河の守賴盛・淡路の守教守。侍には、筑後の守家貞・主馬の判官盛國以下、總勢合せて三千餘騎、六波羅を打ち出で、西河原に控へた。重盛は生年廿三、今日の軍の大將とて、赤地の錦の直垂に、櫛句の鎧、龍頭の兜の緒をしめ、小鳥といふ太刀をばき、黄月毛なる馬に乗つて、諸兵を勵まし、「年號は平治、都は平安城、我等は平氏、三事既に相應じて居る、敵を平げること何の疑もなし。」と云つて、三千餘騎を三手に分けて、陽明・待賢・郁芳の三門に押し寄せた。大内には源氏の勢、白旗二十餘流を押し立て、満ちくして居る。こちらは

三十餘流の赤旗を差し立て、三千餘騎が一度にどつと関をつくれれば、之れに應じて大内も響き渡る。此関の聲に、信賴は早や膽をつぶして青くなり、人並に馬にも乗りかれ、侍から乗せて貰つてもまだ乗れず、落馬して鼻血を流す仕末。義朝は此體をばたと睨めつけ、「臆病者奴が。」とつぶやき乍ら、郁芳門へ向へば、信賴も漸くのこととて待賢門へ向つたもの、物の役には立ちさうもない。重盛は五百騎を大宮曲に残し置き、五百餘騎を率ゐて押し寄せ、名乗をあげて呼ばばりかけるけれど、信賴は返事も出來ず、「侍防げ。」とて、自ら退けば、防ぐ侍は一人もない。重盛は勢に乗じて、大庭まで攻めよせれば、義朝は齒軋して悪源太を向はせた。源太かしこまつて驅けつければ、鎌田の兵衛・波多野の次郎・齋藤別當・岡部の六彌太・熊谷の次郎などいふ勇士十七騎、響をならべて馳せ向ふ。義平、名乗りを揚げて、五百餘騎の真中へわつて入り、縦横自在に蹴散らし、重盛を生捕りにせんと追ひ廻はす。左近の櫻・右近の橋を七八度も追ひ廻はせば、十七騎に荒らされて、五百餘騎は颯と退く。重盛は、前の軍勢

を留め置き、新手の五百餘騎を具して、再び攻めよせる。源太は駈け向うて、「此度は遁すな、組んで捕れ。」と、勇み駈ければ、十七騎も後れず駈けつける。平家の侍百餘騎が、押し隔てようとするを物ともせず、弓を小脇に掻き挟み、鎧踏張り、突つ立ち上がり、兩手を舉げて、「幸に義平、源氏の嫡子、御邊は平家の嫡男、こよなき相手、寄れや組まう。」と云ひ乍ら、大庭の椋の木の廻りを五六度も追ひ廻はす。重盛叶はずして、大宮面へ引きかへす。悪源太、弓杖ついて馬に息をつがす内、「速かに敵を追ひ出せ。」と、義朝から使が来る。かしこまつたとばかり、色もかはらぬ十七騎は、疾風の如く、敵の真中へわつて入り、二條を東へ追撃する。重盛目がけて追ひつく刹那、馬の足は物にふれてどうと倒れる。鎌田が矢は、二度まで重盛が鎧にあたつたが透らない。今度は馬を射ると屏風を返す様に倒れる。重盛は材木の上に刎れ飛ばされ、兜も落ちた。鎌田押し寄つて組まうとする所へ、與三左衛門の尉景安馳せよつて、鎌田に組む。源太は直様重盛に組まうとしたが、鎌田を助けようか、重盛を討たうかといふ二

途に迷ひ、重盛にはまた寄り合ふこともあらう、正家を討たせてならぬと思ひ與三左衛門が首をとつた。重盛、今度は源太と組まうとする所へ、新藤の左衛門が馳せて来て、悪源太にむづと組んだ。正家は重盛に組まうとしたが、主を討たせては叶はぬと思ひ、新藤の左衛門に落ち重なつて、其頭をかいた。重盛は、此間に虎口を遁れて、六波羅へ落ちた。三河の守頼盛は、郁芳門へ向うて義朝及び頼朝の勢と戦ひ、一進一退、敗中々決し難い處へ、悪源太が應援に来る。茲に鎌田が下人、八町の次郎といふ早走の勇士が、頼盛の兜に熊手を引きかけると、頼盛は其柄を截つて逃れた。其太刀は抜け丸といふ名刀であつた。其他の勇士、何れもよく戦つたが、兵藤内家俊は、元來大臆病者ながら、大勢の者と共に進む内、馬を射られて、結局、幸と思つたか、とある小屋の中へ逃げ込んだ。其子家次は、父に似ぬ勇者で、散々に戦うたが、父の馬は射られ、其姿も見えれば、生捕られしことと思ひ、無念に堪へず、多くの敵を斬りふせ、最後に、とある敵と刺し違へて死んだ。此様を小屋の中で見て居た父は、出

うか／＼と思つたが、戰場がこぼれて、遂、子を見殺しにしてしまつた。後日憎まぬものはなかつた。平家は、勅諭によつて六波羅へ退けば、源氏は謀とは知らず、内裏をすて、出て戦ふ。其間に、官軍は内裏に入つて門々を固め防いだので、源氏は再び内裏へ入ることは出来ず、止むなく、六波羅へ攻めよせた。信賴は、待賢門を破られて後は、折あらば落ちよう／＼と、思つて居たのであるが、今は六波羅へもよせず、河原を上つて落ちて行く。金王丸といふが、之を見つけて、「追ひかけやうか。」と云へば、義朝は、「う、つちやつて置け。あんな不覺人あればこそ、戦が出来ぬ。」と云つて、かまはなかつた。

義朝六波羅に寄す、並に賴政心變り、漢楚の戦一 六波羅方は、五條の橋を毀ち、其橋板を楯として待ち構へて居る所へ、源氏の軍勢が押し寄せて関をつくる。清盛は、其聲に驚いて、兜を逆まにかぶる。兵は笑ふ。「敵に向へば、主上を後ろになし奉るを畏みて。」と、苦しい云ひ譯をする。重盛は、五百餘騎を以つて、出で迎へた。兵庫の守源賴政は、三百餘騎で六條河原に控へて居

た。惡源太は、其貳心を嫌み、五十餘騎で散々に蹴散らした。賴政は、必ずしも義朝に敵對しようとも思はなかつたけれど、義平に追ひ立てられて、六波羅へ加擔する様になつたので、つまり、義平が若氣の致した誤である。支那でも、漢の高祖と、楚の項羽と、相争ふこと八年に及んだ。其時、王陵といふ者、何れにもつかず、徐ろに勝敗を見て居ると、項羽は、王陵の母を捕へて、楯の面に据ゑ、孝心深き王陵の來り降るを待つて居た。此母は、楚に降るなど王陵に申送り、又、伏して死んだ。王陵は即ち高祖の臣となつたのである。斯くの如く、如何に剛勇なりとも、人を和するの法を知らずば、眞に善く戦ふものとは云へない。故に兵書に、「天の時は地の利に如かず、地の利は、人の和に如かず。」と云つてある。

六波羅の合戦 惡源太は、其まゝ六波羅へよせると、平家方では、金子の十郎家忠が、眞先に驅けて戦つたが、矢種はつき、太刀は折れ、今一合戦と思つても致方ない。源氏の侍、足立右馬の允遠元が情に、一口の太刀を得て、なほ

も勇戦した。悪源太は、六波羅へ寄せ乍ら、門内に入らぬを残念に思ひ、屈強の者五十餘騎と、鎧を傾けて討つて入る。清盛は、黒色づくめの扮装にて出て迎へ、源平互に入り亂れ、一進一退、一合一離、鎧を削つて戦ふけれど形勢は千變萬化して勝敗容易に決しさうにも見えぬ。されど、源氏は今朝から、息もつがずに戦ふのに、平家は、新手を入れかへく、驅け戦ふので、源氏、遂に負けて、門外へ退き、河を渡つて、西へ退いた。義朝は、此様を見、義平が退くは家の瑕、討死に如かず。」と云つて、驅け出すのを、鎌田の次郎は馬より飛び下り、手綱の袂に取り縋つて、「源氏の兵強しと雖、今朝よりの戦に、馬なづみ、人疲れ、物の具はやぶれ、矢種も盡き、太刀は折れ、残りし勢も、過半は創を負ひたれば、更に戰ふとも、利あるべしとも思はれぬ故、一時山林に身を隠くしても、敵に勝ち誇らせぬがよい。」といふ事を、熱心にすすめた。義朝は、「武士として死すべき時機を失すれば、却つて最期に恥が多いから、爰で討死しよう。」と、進み出るけれど、正家は、「死を一途に定むるは近くして易く、謀を

萬代に貽すは、遠くして難い。」といふ言を引き、越王・漢祖の例を擧げて、はや馬の口を、北の方へ向ければ、鎌田が従ふをせめてもの力として、餘儀なき様に、河原を上つて落ち行かれた。

**義朝敗北す** 義朝が落ち延びる間、源氏の郎黨は、けなげにも防ぎ矢をつとめた。義朝は途中で、鎌田に預けて置いた江口の遊君の腹に出来た娘のことを思ひ出し、「負け戦と聞いて悲ませようより、却つて殺すがよい。」とて、鎌田に其旨を云ひつける。鎌田は止むを得ず、鞭をあげて、六條堀河へ向へば、姫は、今しも讀經中であつた。軍の模様を問へば、負軍であると答へる。女の身の悲しさに、生きて恥を見ようより、兵衛に殺してくれと頼めば、實は其用で来たのだといふ。「本望である。」と云つて、佛前に手を合せ、念佛申し給へば、鎌田はさすがに涙にくれて、刀の當て所もわからぬ。「敵が近づくとあらうに、早く早く。」とせき立てられ、力なくもうちまわらせた。此姫は當年十四歳である。首をもつて義朝に追ひつき、見参に入ると、一目見て涙に咽ばれた。兎角する内

に、平家の軍兵は、信賴・義朝其他の者の邸に火をかけると、妻子眷屬は逃げまどふ。比叡山には、西塔の法師二三百人、千束が嶽に待ちかけて居るとの事。義朝は口惜しく思つたが、齋藤實盛が策により、兎にも角にも此處を通りぬけると、八瀬の松原にかゝつた時、後ろから呼びかける者がある。信賴であつた。而かも、「落ちのびる時には相連れ立ちてといふ約束を忘れたか。」と、人並に問ひ詰めるので、義朝は、あまり腹立たしく、「かゝる大事を企てながら、一戦もせず、己れも滅び、人をも失ふ日本一の不覺人。人らしく物宣ふ。」と云つて、持ち合はせた鞭で信賴が左の頬をしたゝかにうつた。信賴は、返事もせず、頬りに鞭のあとを撫でまはして居た。こんなこともあつて、落ちのびる内に、横河の法師四五百人が、義朝・信賴の落つるを打ち留めようとて、龍華越といふ處に、待ち設けて居る。そして、義隆・朝長の二人を射たので、義朝は怒つて三十餘騎の者と共に、蹴散らし、追つ拂つて、やがて龍華の麓で、馬を休めた時、後藤兵衛實基を召して、彼れに預け置いた娘のことを問うた。實基は自分

の娘によく由合めて置いたから、別條あるまいと、申したけれど、義朝は、實基に、「これから都へ歸つて、姫を育て、尼となし、後世の菩提を弔はせてくれ。」と頼む。實基は、「主の行く末を見届けて後に。」と云ふけれど、「思ふ仔細あるに、より、早く〜。」とせかれて、餘儀なく都へ歸り、姫君に従うて、此處・彼處にかくしまゐらせた。後に、源氏の世となつて、一條二位の中將能保卿の室となられた方である。

#### 信賴降参並に誅戮

信賴は、義朝に捨てられ、八瀬の松原から引きかへした。附き従うた五十騎ばかりもいつしか散つて、傳子、式部太夫ばかりになつた。仁和寺へ行き度いと思ふまゝに、蓮臺野へ出た。葬式歸りの山法師にあひ、主従共、具足・太刀・馬・鞍までも剝がれ、白衣のまゝ、仁和寺に着いて、憐みを乞うた。此處には、伏見中納言源師仲・越後の中將成親も既に來て居る。上皇、もと御いつくしみのあつた人々故、傍にかくし置き、信賴を助け給へといふ書面を、主上へ御つかはしになつたが、別に御返事もない内に、三河の守

頼盛等三百餘騎が、仁和寺へ押しよせ、信頼始め、五十餘人を搦め捕つて歸つた。成親は既に死罪に定まつたのを、此度の勳功により重盛に預けられ、信頼は、謀叛の仔細を訊ねられると、何事も答へず、只、「天覽の勸めである。」といふのみであつた。「命だけは助かり度い」と願ふので、重盛は、「これ程の不覺人を生かして置いても障りにもなるまい。」と申されたけれど、聞入れられず、死罪に定まつた。やがて六條河原へ引き出され、敷皮の上に据ゑられても、なほ思ひ切れず、起きつ伏しつして、歎き悶えて居るので、刀の下し様がない。斬手松浦の太郎重俊は、止むを得ず、搔き首にするといふ見苦しい有様であつた。斬手歸つて後、人々寄つて最期の有様を見ると、軍の日、馬から落ちた鼻尖の創、義朝に打たれた鞭のあとまで、まだありしと、残つて居たので、諸人は思はず吹き出した。

官軍除目、並に謀叛人刑罰

師仲は、信頼が内侍所を東國へ下さうとしたのを、東の洞院に隠し置きまゐらせたのが、朝敵に與みせざる證據であ

るといふ申開きが出来た。河内の守季實、其子季守は、遁るゝ由なくて誅せられた。やがて、除目を行はれて、大貳清盛は正三位に敘せられ、嫡子重盛は、伊豫の守に、次男基盛は大和の守、舍弟頼盛は尾張の守と、夫々任ぜられた。又、信頼の兄、基家以下七十三人の公卿武人は、其官職を停められ、或は流され、或は誅せらるゝもの、後日に至るも多かつた。彼の白居易が、「左納言、右大史。朝に恩を受けて、夕に死を賜はる。」と、詠んだことも思ひ出でられる。堀河天皇の嘉承三年、源義親、誅伐せられてより、近衛院の久壽二年に至るまで、三十餘年間、天下靜謐にして、延喜・天曆の世にも劣らざりしに、保元以來、引きつゞき戦亂の世となつたので、心ある人は、互に歎き合つた。二十九日に、公卿僉議あり、凶徒、内裏を汚がした後故、清められぬ内は、還幸畏多いなど、評議は頗るまち／＼であつた。

常磐註進及び信西の子息遠流

義朝は、九條院の雜仕、常磐の腹に三人の子供があつた。兄は、今若とて七つ、次は乙若の五つ、末は、今年生れの



牛若である。此等が心がよりであるからとて、金王丸を途中より歸へして、「軍に打ち負けて、行方定めず落ちのびるが、落付く處あらば、迎へるにより、それまでは、何處かに身を忍べ。」といふ旨を傳へしめた。常磐は、伏し沈んで泣き乍ら、「いづかたへ。」と問へば、「東の方へ。」と答へ、「御行末が氣にかゝるから。」と云つて、丸は其儘また立ち去つた。豫れて、流罪に處せられた信西が十二人の子供は、召し返さるべき筈であるのに結局流罪に定まつた。少し餘談に亘るが信西の子供は、和漢の才身に備はり、配所に赴く日まで、歌を詠み、詩を作つて、互に名残を惜んだのであるが、中にも、播磨の中將成憲は、老いし母、幼き子をふり捨て、遠遠の地へ行かねばならぬのであつた。粟田口の邊に馬を駐めて、

道の邊の草の青葉に駒とめて、なほふるさとをかへりみるかな。

と詠じ、近江路・鳴海湯・小夜の中山・宇津の山をすぎ、富士の高嶺を、まのあたり仰いで、足柄・武藏野とすぎ、下野の國に入り、我すむべき室の八島と

云ふを見やれば、烟細く立ちのぼつて、感涙止め難きまゝに、

我がためにありけるものを下野や、室の八島に絶えぬ思ひは。

と詠まれた。夢にも見ようと思はなかつた此土地が、今はわが住家と定まつたのである。然し乍ら、幾くもなく召し返さるゝ様にはなつた。

義朝青墓に落着く

落ちのびた義朝は、堅田の浦へ出て、泣く／＼義隆の首

を、深く湖に沈め、船を求めて渡らうと思ふけれど、風波荒きまゝに、引き返し、各々道を替へて、落ちようと思ひ、後會を約して、二十餘人の者に違はとらせ、義平・朝長・頼朝・重成・義信・正家・金王丸の七人と共に、勢多をさして落ちた。時は十二月二十七日、夜更けての事なれば、終日の軍に疲れはてた幼い頼朝は、一人遅れ、途中、妨礙に遭ひ、漸く切りぬけて一行に追いつけば、雪は益々深くなる、道細くして馬は通ぜず、徒歩になつて漸く、美濃の國青墓の宿へ着いた。此處の長者、大炊が娘、延壽といふ女との間に、十歳になる夜叉御前といふのがあつたので、こゝへ入れば、斜ならず待遇した。此處よ

り、義平を飛驒へ、朝長を信濃へ向はせたが、朝長は昨日の痛手に堪へず、歸り來り、父の刃にかゝつて失せた。

義朝野間下向、並に忠致の心替り」大炊は、「此處でしづかに、年を送られよ。」と勧めたけれど、「海道故都合あし。」とて、立ち出づる時に、宿の者共、二三百人押し寄せて來た。重成は、義朝の身代りとなり、自ら義朝なりと名乗り、散々に戦つて失せた。義朝は、夜になつて宿を出で、義信にも違をとらせ、尾張の國、野間の内海へ、二十九日について、長田の莊司忠致方に宿り、「せめて三日の祝過まで。」と、頼りに勧められるので、心ならずも逗留した。其時、長田は、子息景致と相談し、平家の恩賞に預からむとて、義朝を風呂に入れ、長田には酒を強ひ、夫々手配して、義朝始め一同を殺す計畫を整へた。かくとも知らぬ義朝は、金玉丸に劍をもたせて風呂に入った。「帷子を持つて來い。」と云ふけれど誰も居ぬ。金玉丸は腹をたて、走り出た其隙に、豫れて忍ばせた、三人の侍が走り出る。一人が組みつく。押し伏せる所を、左右から二刀づゝ刺した。「鎌田

は居ぬか。金玉丸は。」とあせるけれども仕方がない。其儘息は絶えたのである。金玉丸は歸り來り、怒つて、三人共斬り伏せた。此變を聞いた鎌田が、立ちあがる所を、景致が後ろから首を討ち落した。折角、此處まで落ちのびた兩人はふとした油断から、何れも三十八歳を一期として、相果てたのである。義朝は長田が主人である。鎌田は長田が婿である。而かも利慾の外、何事をも思はぬ長田は、斯くの如くにして、主人と婿との首を討ちとつた。鎌田が妻は、是を聞き、討たれし處へ尋ね行き、「貳心なりと思はれんが心苦しい。」とて、刃に伏して見事に死んだ。人の心程わからぬものはない。白氏文集に、「天をも測りつべく、地をも測りつべし。只、人のみ防ぐべからず。」と、云つてあるは、正に斯くの如き場合を穿つたものであらう。

賴朝青墓に着す

賴朝は、二十八日の夜、再び父にも兄にも後れて、雪の中にさまよつた。途中で召捕られさうな危険もあつたが、幸にして、情ある尼にあひ、其家で正月を送り、人目を忍んで、道にもあらぬ處を通つた時、一人

の鵜飼が見つけた。しかし、親切な鵜飼であつたので、有りのまゝを云うて女の姿に様をかへ、青墓へ送り届けて貰つた。延壽は非常に喜んで、色々にもてなしたが、名刀髭切を大炊に預けて、急ぎ東國へ下つた。

卷 三

金王丸尾張より馳せ上る 一年も暮れて、平治二年となつたけれど、内裏では元旦の儀式もなく、朝拜も止められた。正月五日の朝まだき、義朝の召使の童金王丸は、常磐の處へ馳けつけ、馬から飛びおり、物も云はず泣き沈み、暫くたつて、去る三日の曉に、尾張の野間といふ處で、長田の四郎といふものゝために、頭の殿の討たれ給ひしことを物語れば、常磐を始め、子供達も皆悲しみ泣いた。軍の中からさへも子供の事を氣にかけて、金王丸をつかはされた程であるのに、其心配した人が最う亡くなつたのであるか。それにしても此子供をどうしたものであらう」と、常磐が泣き沈めば、金王丸も泣く。金王丸、今は計

報の使も果したから、甲斐なき命惜しからずと思つたけれど、鎌倉の曹司も兵衛の佐も囚はれたであらう。幼い者はあてにならぬ。さうすれば、後を弔ふものもあるまいと思つて、或寺に入つて髪をおろし、諸國七道を修行して、義朝の後世を弔うた。

長田義朝を殺し六波羅に馳せ参る。附、義朝の首を梟く 七日には、彼

の長田の四郎忠致、其子景致が、義朝、正家の首を持参して上洛し、賞を望んだ。平太夫判官兼行が請取つて、實檢し、越えて九日に、檢非違使が八人行つて、左京の獄門の樗の木に、首を梟けた。義朝はもと下野の守であつたので、誰れとも知れず、一首の歌をかきつけた。

下野は紀(木)の守にこそなりにけれ、よしとも見えぬ上げ司かな。  
或者が、此落書を見て、「昔、將門の首が獄門にかけられし時、藤六左近といふ洒落者が、

將門はこめかみよりぞ切られける、たばら藤太がはかりごとにて。

と詠むと、將門の首が苦笑したさうな。」と物語れば、「義朝も名將なれば、其首も苦笑しさうなものだ。」などと語り合つた。翌十日に、改元あつて、年號は永曆となつた。此戦亂を忌んだからである。

〔忠致尾張に逃げ下る〕

永曆元年正月二十三日、除目が行はれて、長田の四

郎は壹岐の守に、同景致は兵衛の尉に任ぜられたが、これ位には満足せず、「義朝が所領、播磨の國を賜はり、左馬の頭にもなされるか、もしくは、美濃・尾張をば賜はり度い。」と、厚がましく願ひ出た。筑後の守家貞は、其不義、其貪慾を憎く思つて、「二十の指を二十日に截り、しや首を鋸で挽き切ればよい。」と憤る。清盛も、「同様に思ふけれど、世がまだ静まりきらぬから、型の如く恩賞を行つたのに、不足など申出ても聞き届けるものか。」と惡む。重盛も勿論同様である。されば、誅戮せられるなどいふ噂さへ立つたので、そこへ尾張へ逃げ下つた。其朝、宿に何者か、  
 落ち行けば命ばかりはいきのかみ、身のをばりこそ聞かまほしけれ。

と詠んで捨てた。

〔惡源太誅せらる〕

同じき二十五日には、飛驒へ落ちた筈の惡源太が、近江

の國、石山寺の附近で、難波の三郎經房が郎等に生捕られて、六波羅へ來た。それについては、次の様な事情があつた。源太は、飛驒の國へ下る内に、軍勢は多くついたが、義朝のうたれた噂と共に、心替りして皆はなれてしまつたので、自害しようかと思つたけれど、徒らに死ぬよりは、清盛か重盛か、せめて一人を討つて、無念を晴らさうと思ひ、都へ上つて、六波羅を窺うて居る内に、舊臣、志内の六郎景澄といふ者に遇つた。景澄は、假りに平家に使はれて居るとのことなので、彼れを頼んで、主人の様にし、義平は、下人の體にこしらへて、六波羅へ出入し、隙を窺うて居た。然るに、景澄は何時にも下人と共に食事し、而かも人に見せない事が、家主の好奇心を喚起した。或日、家主は、障子の隙から、のぞいて見ると、主従全く轉倒して居るので、さては、源氏の郎等と聞きし此人が、惡源太を隠し置くのであらうとて、急ぎ平家に知らせた。

此處は三條烏丸なのである。十八日の酉の刻頃、難波の次郎經遠が、三百餘騎で押し寄せ、四方を取りまいた。義平は、袴のそばを高く挟み、名刀石切を抜き放ち、雑兵四五人を斬り倒し、家の軒に、手をかけて、屋根に飛び上り、屋根つゞきに、何處ともなく逃げ失せて、石山邊に忍びかくれて居たのであつた。然るに運つき、本意を達せずして捕へられたのである。「義平程の大事の敵を、暫しも生かして置くはよくあるまい。速かに誅せられよ。」と云ひし外は、何事も云はない。やがて、難波の三郎に命じて、六條河原で誅せられる。敷皮の上座し、臆する様子もなく、「敵とは申し乍ら、義平程の者を、白晝、河原で斬るとは遺憾である。去る保元に源平數多誅せられたが、晝は西山、東山の片邊で斬り、適々河原で斬らるゝ者も、夜に入つて斬られたのである。弓矢とる身の常として、今日の人の上は、明日の身の上となるものを。平家の奴原は、上下共に、情も物も知らぬ者共ぞ。去りし年、熊野詣での際、馳せ向つて、湯淺・藤代の邊に取り籠めて討つか、但しは、安部野に待ちうけて、一人残さず

討つべかりしに、信賴といふ不覺人に妨げられ、今日、此恥かしめを見るが口惜しい。」と云つて、難波の三郎に向ひ、「己れは義平が首打つ程の者か。晴れの所作ぞ。能く斬れ。下手に斬るなら、しや顔に喰ひ附くぞ。」といふ。三郎は、「我手にかけて首が、いかで頬に喰ひつけようぞ。」と云へば、「今喰ひつくにはあらず、後に雷になつて蹴落すのである。」などゝのべ、殊更に首を高く差しのべる。經房、太刀をぬいて後へ廻れば、「能く斬れ。」と云つて、睨めつけたまなざしは凄くものであつた。生年二十歳。

〔清盛出家并に瀧詣で、惡源太雷となる話〕 雷になると云つた事について

ては、後になつて思ひ合はされることがある。清盛は、病のために、仁安二年十一月、五十一で出家し、法名を淨海と云つた。其ためか、病は次第によくなつて、三年の七月七日、攝津の布引の瀧を見ようとて、一門連れ立つて行くことがあつた。難波の三郎ばかりは、夢見がわるいからとて、辭したけれど、一同に勵まされて加はつた。瀧をながめて悦んで居る内に、一天俄かにかき曇り、

雷鳴激しく、難波の三郎は、「彼の時の源太の目つきが忘れられない。」と云つて、恐れたが、此時、遂に雷に打たれて死んだ。清盛も、非常に恐れて、守袋を振りまはした。其驗か、震死だけは免れた。

〔頼朝生捕られ常磐落つること〕次に兵衛の佐頼朝は、同年二月九日、尾張の守の手に捕はれて、六波羅へ送られ、朝長の首も献ぜられた。頼朝は、尾張の守の家人、彌平兵衛宗清といふものゝために、關が原で捕へられ、朝長の首は、宗清が、頼朝を六波羅へ送る途中、青墓の大炊が處へ宿つて、偶然見つけ出したのである。頼朝は一時宗清に預け置かれた。彼の延壽が腹の娘夜叉御前は、頼朝の囚はれて上さるゝ時、「われも義朝の子なれば助かるまじ、一人一人失はるゝより、佐殿と諸共に。」と、泣き悲しんだのであるが、それも叶はず、二月十一日の夜、家をぬけ出で、杭瀬河に身を投げた。母の延壽は、夫にも娘にも後れ、同じ流れに身を投げようとしたが、親にとゞめられて果さず、せめてもの事にと、尼になつて、亡夫並びに娘の後世を弔つたといふ事である。

六波羅では、頼りに義朝の子供を、探がし求め、既に三人出で、二人は獄門にかけられた。頼朝も追つつけ梟けられることであらう。

此外には、常磐が腹に三人の男兒ある筈とて、尋ねられた。常磐は、頭の殿には後れ、せめてたよりの此子供まで失はるゝと聞いては、身もよもない。さればと云つて、隠れ場所もなく、泣き悲んだはて、観音詣りをしようと思ひ、二月九日の夜、三人の子供をつれて、清水寺へ参つた。一人を懷に、二人を兩脇に据ゑ、さめくと泣いて、終夜、祈請したのである。曉方になつて、寺僧が見て餘り氣の毒に思ひ、「暫し此處に忍び給へ。」と、勧めたけれど、「六波羅が近いから。」とて辭し、宇多郡を志して、大和街道を南へと進んだけれど、習はぬ朝の旅立ちなれば、露と涙とに、袂も裾も濡れはてる。二月十日のこと故、餘寒猶烈しく、嵐に凝る道芝の氷に、足を傷ひ、血潮の流れて裾を染めるなど、見るさへもいたくしい。漸く伏見の伯母の處を尋ねあてたが、留守と稱して、つれなくも入れない。止むを得ず、とある伏せ屋に一夜の宿を頼み、明くれば、木

幡山の方さして、子守歌など謡ひ聞かせつゝ行くけれど、子供は疲れて、ひれ伏してしまふ。一人は抱き、二人の手をひいて居るのであるから、何として見ようもない。道行く人々の情によつて、漸くのこと、宇多郡龍門といふ處の伯父を尋ねて、隠れることになつた。

賴朝遠流に宥めらる、附、吳越の戦

宗清に預けられた賴朝は、間もなく誅

せられるとの事なので、「命助かり度くないか。」と問へば、「親・兄弟も親戚も失つた身には、父祖の後世を弔ふため、命は中々に惜しい。」と云ふので、宗清も氣の毒に思ひ、尾張の守の母、池の禪尼といふは、清盛の繼母に當つて清盛も此人の言葉にはそむかぬ事、慈悲深い人である事、禪尼の亡兒家盛が賴朝に似て居る由を禪尼に話した事、などを聞かせて、「禪尼に願うて見よ。」と勸める。「誰を通じて願ふべきか。」と云へば、「叶はぬまでも宗清が願うてやらう。」と云つて、禪尼の處へ行き、賴朝が父の後世を弔ひたいと云ふ事のいぢらしい旨を述べる。禪尼は、亡くなつた子に似て居るといふので、懐しくてならぬ。「何時斬

るのか。」と問へば、「十三日だ。」と云ふので、叶はぬまでも願うて見よう。」といつて、當時、伊豫の守から、左馬の頭になつた重盛を召し、賴朝が父の後世を弔はうといふが不便なこと、家盛の稚な姿に似て居るといふから、助けて置いて、家盛が形見として見せて貰らひ度いと云ふ事を傳へると、重盛は、父に此事を告げる。清盛は、池殿の仰せは、父上同様に、逆様な仰せでも、違ふまいと思つてるのなれど、餘人ならば兎に角、義朝が子供、殊には見所あればこそ、義朝が他の子供より大切にしたい頼朝を、助ける譯にはゆかぬ旨を答へさせると池の禪尼は、夫忠盛が世になければこそ、其言の輕んぜらるゝ事を怨み、源氏一門亡びつくした今日、幼い者一人助け置くと何程の事があらう。前世に賴朝に助けられたか、賴朝が頼りと痛はしい事。物事は一つは使柄といふ事もあればなど云うて、此事叶はずば、尼は病氣になつて助かるまい、と云ふ意を、重盛をして再び傳へしめた。清盛は、頗る當惑したが、重盛は、「女性のかよわき心をなやますも、悪しかるべく、それに、賴朝一人生かし置くと、家運傾かず

は何の障りにもなるまじ。之れに反して、誅戮してしまつても、果報つくる曉には、一門長久なる事は出来ない」と、道理をつくして述べた。十三日に斬ること延べたものゝ、慥かな返事もせられなかつた。頼朝は、父の四十九日も近づくと云ふので、卒塔婆をつくつて貰つたりなどして、供養をした。こんな事を聞いた池殿は、益々痛はしくなつて、色々に取りなして、遂に、流罪と云ふことになつた。この事を聞いた世の人は、尼に縋つて甲斐なき命を助かつた未練さをそしるもあれば、「保元の亂に於ける義朝の勳功は並びないのに、恩賞は清盛に劣つたと云ふことから、逆徒に與みして身を亡ぼしたけれど、大忠の餘薫はなほ源家に留まつて居る。一門何れ榮える折もあらうによつて、斯くの如く一命を惜んだのである。越王勾踐が、會稽の恥を雪ぐことの出来たのも、命あればこそ出来たのである。頼朝の將來は恐るべし」と、褒める者もあつた。

## 常磐六波羅に出づ

常磐が腹の三人は、母がつれて身をかくしたのであるか

ら、中々わからぬ。止むを得ず、常磐が母を召し出して訊ねるけれど、「只わからぬ」と答へる。色々に責め問へば、母は泣くく、「六十に餘る身の命、今日明日とも知れぬ身をなしみ、未遙かなる孫共の命を失はす道理はないにより、よし、知るとも申すまじく、まして知らぬを如何に申さうぞ」と、云うて居るので、水火の責にも合はせかねない噂が立つ。此由を聞いた常磐は、謀叛者の子なれば、所詮、助けることも隠すことも叶はぬのであらう。されど、我等故に罪なき母の命を失はせては悲しい事と、心を定め、三人の子供を引つれ、御所へ行つて「女の身のはかなさには、片時も身に添へて置きたいと思ひ、此稚い者を引きつれ、暫し田舎に忍びしも、妾故に、罪なき母上が、憂き目にあひ給ふと聞くが悲しく、恥をも忘れて出で参りたれば、早く我等を六波羅へ送り、母の苦しみをとゞめたまはれ。」と申せば、女院をはじめ居合はせた女官達、皆其孝心に感じ、親子四人、清げな車にのせて、六波羅へ遣はした。伊勢の守景綱、其次第を取りつくと、やがて清盛が對面する。母をゆるさるさい旨をのべ



貴賤高下、子を思ふ心に二つなきを訴へ、「妾、此子供を失うては、甲斐なき命片時たへ得べしとも思ひよらねば、先づ妾を失ひ給ひて後、子供をば如何様にも、御取りはからひたまはらば、此世の御情、後世までの御利益、これに過ぐるものは侍らぬ。」と、泣き口説けば、六つになる乙若は、母の顔を見上げて、「泣かてよく申し給へ。」と云ふので、母は愈々涙に咽ぶ。さすがに心強い清盛も、ひそかに涙を押し拭ひ、並み居る兵共も皆袖を絞つた。やがで、母はゆるされたが、「老いの身を助けんとて、何しに子供をつれて来たのであらう、四人の孫子を失はうより、先づ老いの身を失うて貰ひたい。」と事を願うて、これも泣き悲しんだ。清盛は、「此子供のこと、君の仰せを承つて、執行ふべし。」と云へば、一門の者は、「此三四人の成長は間のない事なれば、平家のため未恐ろしい」と云ふけれど、年長の頼朝を助け置く上は、兄を助け、弟を誅すべき道理なく、止むを得ぬ次第とあつて、稚きまゝに、流罪にもせられなかつた。

經宗、惟方遠流並に召し返さる一話しかはつて、豫れてより、後白河院は

八條堀河なる、皇后宮太夫顯長卿の邸に、御移りになつたのであるが、毎日、御棧敷から、往來の人を御覽じて、慰んで御出でになつた。然るに、二月二十日頃、内裏よりの使であると云つて、人が来て、御棧敷を外から板で打ちつけてしまつた。上皇は御憤り深く、主上は、幼くましませば、こんな御計らひのあるべき筈なく、必ず、經宗・惟方が所爲に相違ないとして、清盛に仰せて兩人を召し捕らせられた。死罪に行はるべきであつたけれど、忠通公の御宥めにより、一等を減じて、經宗を阿波に、惟方を長門の國へ流された。信西が子供を流す様になつたのは、此二人の計らひであつたこともあらはれ、信西が子供は皆、召しかへされた。源中納言師仲卿も、遁るゝ由なく、播磨中將成憲の配所室の八島へ流されることになつた。三河の八橋を渡るとて、夢にだにかくて三河の八橋を、渡るべしとは思はざりしを。と、誅まれた事を、上皇御聞きになり、哀れに思召して、召しかへされた。其後、經宗も召しかへされて右大臣となつた。世の人、阿波の大臣と云つた。左

大臣伊通公は、「昔、吉備の大臣といふことを聞いたに、今は、粟の大臣が出来た。後には稗の大臣が出るであらう。」と云つて笑はれた。惟方は、罪重く召しかへされぬ由を聞いて、心細く思つたのであらう。故郷へ

この瀬にも沈むと聞けばなみだ河、流れしよりも濡るゝ袖かな。

と詠んで送つたのを、人も憐に思ひ、君も御感になり、後に赦免となつた。

〔頼朝の遠流と盛安の夢合せ〕 さて、頼朝の話に立ち戻る。池の尼は頼朝

を召して、助けた事の成行きと、喜ばしい旨を述べると、頼朝も、「甲斐なき一命助かつた御恩の、何時の世にも報い難い。」と感謝する。やがて、池殿の指圖によつて、舊臣を少し探し求め、従へて愈々伊豆へ赴く事になつた。其時、續源五盛安は、耳に私語いて、「必ず出家してはならぬ。」と云うた。永暦元年三月二十日、伊豆の國へ下るについて、池の禪尼へ暇乞ひに行くと、禪尼は、伊豆へ行つても、弓・箭・大刀・狩・漁などは耳にも入れず、只管、孝養をつくすべきを諭し、「我子と云ふのである、必ずそむくな。」と説き聞かせて、我子家

盛のことなどを細々と物語つて、名残を惜んだ。頼朝も、感涙に咽んで、終夜泣き明かした。二十日の曉に、愈々東路遙かに下るのである。盛安の外、僅かに三四の郎等を従へ、檢非違使に追ひ立てられて行く内に、勢多を渡れば、武部の明神といふが見える。此夜は、此社に通夜して行路の祈りをする事にした。此夜、夜更けてから盛安は都で不思議な夢を見た事を物語つた。それほかうなのである。頼朝が淨衣で八幡へ参り、盛安が供をして行くと、十二三の子が、義朝の弓・胡服を持って来る。寶殿の中から、納め置き、後に頼朝に與へるのである。頼朝に、これ喰はせよ」と云ふ聲がして、天童が六十六本の打鮑を頼朝の前に置いた。頼朝は両手で握つて、太い處を三口喰て、小さい處を盛安に與へたといふ夢であつて、義朝の物の具を八幡菩薩が納め置いて、後に頼朝に賜うて、六十六箇國を平定する意味であると説明した。盛安は、伊豆まで御供しようと思ふけれど、都に残した母が心配であらうからと云つて、鏡の宿から強ひて返へした。頼朝は、熱田の大宮司季範が女の腹に出来たので、男

女各一人の兄弟があつた。女の子は、後藤の兵衛實基が、都に隠し置き、男の方は、平家へ頼め捕られ、希義といふ名で、土佐の國、氣良と云ふ處へ流されたのである。

〔牛若奥州下向〕常磐が腹の三人はどうなつたであらうか。兄今若は、醍醐

寺へ上り、出家して全濟と云ひ、次の乙若は、八條の宮、圓惠法親王に伺候して、圓濟と名乗り、末の牛若は、鞍馬寺東光坊の阿闍梨が弟子となつて、遮那王と云うて居た。十一の時、母の言を思ひ出し、系圖を見ると、正しく清和天皇より十代、左馬の頭義朝の末子であることが、わかつたので、是非平家を滅ぼさうと云ふ志を起し、晝は學文を事とし、夜は武藝の稽古に餘念なく、僧正が谷で、天狗から兵法を習つたといふことである。母も師も、法師になれと勧められ、言を左右に托して従はぬ。只、平家の耳に入らんことを氣遣うて居た。斯くの如き時、奥州の金商人吉次と云ふ者が、鞍馬寺へ参つたのに會つて、「奥州に知つてる人があるから、連れて行つて呉れ。」と頼むと、吉次は「連れ

て行くは易いけれど寺の人に叱られるだらう。」と答へる。「何、土用の死人を盗人が取つた程にも思はぬから。」と云ふので、連れて行くに定め、「それにしても同行者があるから、其人の都合によつて日を定めよう」と云へば、丁度其人も参詣に來合せて居る。色々話合ふと、其人は、下總の國の者で、深栖の三郎光重が子、陵の助頼重といふ源氏の一族だとの事である。そこで牛若も、身の素生を打ち明け、承安四年三月三日の曉、生年十六にして、東路遙かに旅立つた。其夜は鏡の宿に泊り、夜ふけてから自ら髪とりあげ、懷から烏帽子取り出してつけて見る、陵の助は、「はや御元服か、御名は如何に。」と問ふと、「烏帽子親もなければ、自ら、源九郎義經と名乗る。」と云うた。日のたつまゝに、下總の深栖が許へ着いて、此處に一年ばかり居る内に、伊豆へ行つて、頼朝にも會つた。此處に居ては、平家への聞えも恐ろしいと云ふので、頼朝の計らひで、舊臣の娘の、今は奥州に二人の子を持つて後家となつて居るものを探れて行つた。二人の子とは、佐藤繼信、弟忠信のことで、義經に従つた。多賀郡へ越えて、

先きに別れた吉次にあひ、其案内で平泉に出で、秀衡に會つて、其邊に暫し世を忍ぶこととした。伊勢の三郎義盛を、上州松井田で得たのも、此途中のことである。

斯くて、事もなく數年が経過した。

賴朝兵を擧げ平家を討つ

兵衛の佐賴朝は、配所に春秋を送ること二

十一年。文覺上人の勸めにより、後白河院の院宣を賜はつた。治承四年八月十七日、和泉の判官兼隆を夜討にして後、石橋山・小坪・絹笠と所々の合戦に勝ちつゞけ、房・總・武藏と、打ち靡け、關八箇國、靡かぬ草木もない勢である。醍醐の禪師全濟・八條の宮の圓濟は、何れも此由を聞いて、馳せ參する。平家は周章て、土佐なる希義を討たす。希義は、討手の向うた時、恰も讀經中である。「讀み終るまで待て。」と云つて、持佛堂に入つて、腹を掻き切つた。九郎曹司も、秀衡が許を出發する。秀衡は、紺地の錦の垂直・紅下濃の鎧・金作の太

刀など、心づくしの物の具を臆にすれば、難有くうけ、白河の關も難なく越えて、大庭野に十萬餘騎を率ゐた賴朝に會ひ、互に、嬉れし涙にくれた。それより、諸所を討ち從へ、足柄・箱根を越えて、黄瀬川に着いた時は、其勢二十萬騎と註せられた。これより先き、平家は、小松少將維盛、五萬餘騎に將として富士川に陣して居たのであるが、齋藤別當實盛が、今夜源氏が夜討するであらうと云うた夜、水禽の羽音に驚いて、一矢も放たず逃げ上つた。養和元年三月には、墨股の合戦に負け、壽永二年七月には、木曾義仲が、北陸より都に入ると聞いたので、平家一門は西海に落ちた。但し、池殿の子供は、皆都に留まつた。豫れて賴朝が、故尼公同様と思ふ由を、申し送つてあつたからである。長田の四郎は、平家にも憎まれたれば、西海へ落ちることも出來ず。止むなく、十騎許りで、降つて來た。「よう參つた。」とて、土肥の次郎に預け置き、後に、範賴・義經が、一の谷を攻めるとき、「身を全うして合戦の忠節を致せ。毒藥變じて甘露となるといふ事もあれば、勳功あらば大なる恩賞を行はうぞ。」と云つて

従はせられた。勇戦甚だ努めたのであるが、戦の後、「恩賞をとらせよう。」と云つて、義朝の墓の前で、土礫といふものにして、なぶり殺しにされた。平家方にもつかず、城に籠つて矢一つ引くでもなく、身命をすてて軍して、難有からぬ恩賞ではある。併し乍ら、不義の報、當然であるとして憐むものもなく、何者だか、

嫌へども命の程は壹岐の守、みのをばりなげ今ぞたまはる。

刈り取りし鎌田が首の報にや、斯かる憂き目を今は見るらん。

と、詠んで、作者、鎌田正家とかいた高札を立て、人を笑はせた。

曩に、頼朝に卒塔婆を作つて呉れた丹波の藤三國弘には、金銀絹布、色々の物を賜ひ、外に、丹波の細野と云ふ處を與へた。頼朝源五は、双六の名手で後白河院に仕へ、院の崩後鎌倉へ來たので、美濃の國、上中村といふ處を賜はり、なほ、後に多記の莊といふを賜はる筈であつたが、頼朝薨去のため果さなかつた。それは、彼の夢に、打鮑を貰つたゞけで、食はなかつたためであると、笑

はれた。

九郎判官は、梶原平三が讒言により、仲悪しくなり、再び奥洲に下り、秀衡をたよつたのであるが、泰衡の代になつて、判官を討たせ、後には泰衡をも滅ぼされた。

かく、日本全國を平定して、建久元年十一月、上洛の途上、義朝と共に落ちのびた際、親切をつくしてくれた鶴飼や、濁酒を恵んだ老翁などにあひ、夫々、品物をとらせて、謝意を表はした。

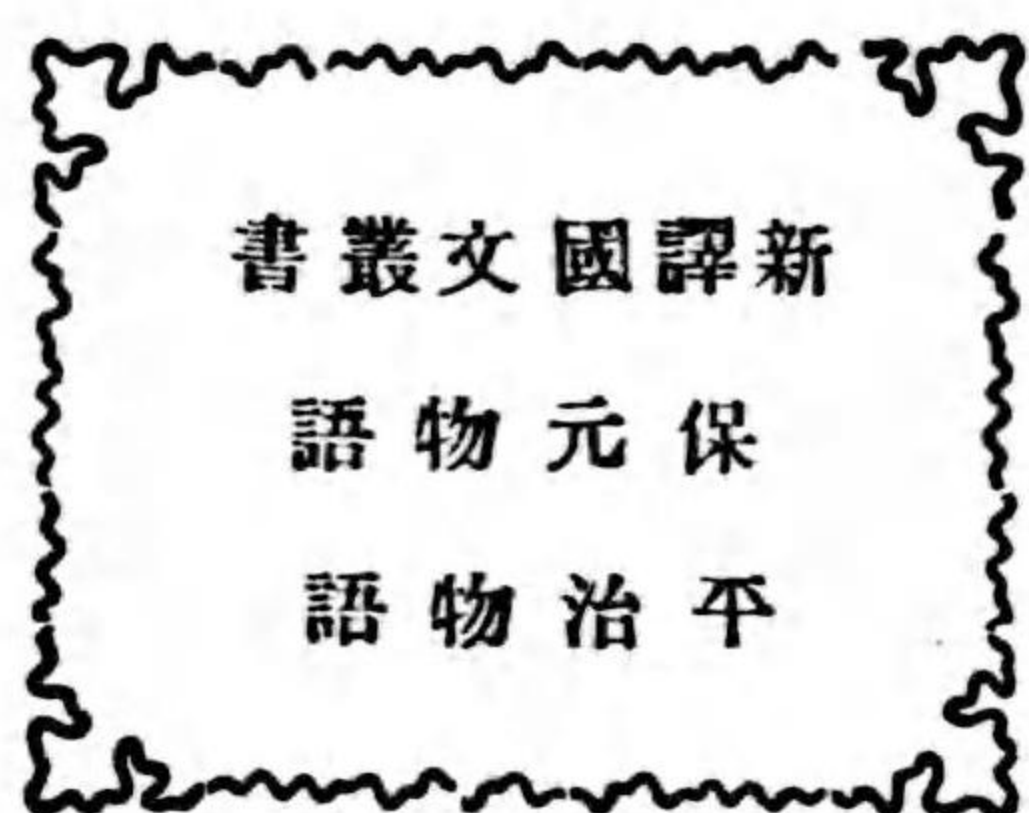
入洛して院に参ると、院は、かれて源氏に傳はつて居た髭切の太刀を青地の錦の袋に入れて賜はれば、三度拜して戴いた。此太刀は、頼朝が囚はれし時、清盛の手に入り、院へ参つたのだとも云ひ、又、大炊が許にあつたのを、清盛が求めるので、別な太刀を差し出した。それが髭切と思はれて、清盛が手を經て院へ参つたので、既に頼朝は、木物の髭切をば、大炊が處から受取つて居たのであると、云はれて居る。

さて、清盛が、賴朝を助けし時、平家を覆へず人とは、よも思はなかつたであらう。又、當時二歳の義經が、母の懷に抱かれて居たのを、後に、我子孫を亡ぼす仇と知つたなら、いかで宥すことをしたであらうぞ。これ、ひとへに、伊勢の大神・八幡大菩薩の御計らひで、あつたのであらう。父の義朝は、三十四歳で勳功をたて、やがて身を滅ぼしたが、其子の賴朝は三十四、義經は二十二歳で、義兵を擧げて會稽の恥を雪ぎ、文治の始めより、諸國に守護を置き、莊園・郷・保に地頭を補して、廢れし家運を興し、武家の棟梁となり、征夷大將軍の院宣をさへ蒙るに至つた。

終

新譯保元平治物語終

大正三年十一月廿六日印  
大正三年十一月廿九日發行



(定價金拾錢)  
郵税(金貳錢)

著作者	須田正雄
發行者	石黒專之助 東京市神田區表神保町三番地
印刷者	荻原勝次郎 東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所	博文館印刷所 東京市小石川區久堅町百〇八番地
發行所	東京市神田區表神保町三番地 文洋社書店 振替東京三九九三
賣捌所	全國各書店



一 矢 賀 芳 士 博 學 文 問 顧 輯 編

刊 次 逐 **書 叢 文 國 譯 新** 篇 數 月 每

語 物 氏 源	編 士 學 文 內 坪	編 一 第
語 物 · 治 平 · 元 保	編 士 學 文 田 須	編 二 第
記 平 太	編 士 學 文 內 山	編 三 第
語 物 花 榮	編 士 學 文 室 小	編 四 第
記 事 古	編 士 學 文 川 吉	編 五 第
語 物 窪 落	編 士 學 文 木 青	編 六 第
解 新 首 一 人 百	編 士 學 文 巢 鴻	編 七 第
記 經 義	編 士 學 文 村 野	編 八 第
解 新 集 葉 萬	編 士 學 文 川 吉	編 九 第
鏡 增	編 士 學 文 木 青	編 十 第
草 然 徒	編 士 學 文 內 坪	編 一 十 第
語 物 昔 今	編 士 學 文 伯 佐	編 二 十 第
語 物 我 曾	編 士 學 文 田 須	編 三 十 第
記 平 太	編 士 學 文 內 山	編 四 十 第
語 物 保 津 宇	編 士 學 文 巢 鴻	編 五 十 第
語 物 氏 源	編 士 學 文 內 坪	編 六 十 第
記 日 蛉 蜻	編 士 學 文 園 今	編 七 十 第
語 物 家 平	編 士 學 文 川 吉	編 八 十 第
語 物 · 唐 · 和 大 · 勢 伊	編 士 學 文 伯 佐	編 九 十 第
紙 草 の 枕	編 士 學 文 田 須	編 十 二 第

刊 續 迄 編 十 五 下 以

錢 貳 金 各 稅 郵 — 錢 拾 金 冊 各 價 定

口 金 貯 替 振 社 洋 文 區 田 神 京 東 兌 發  
九 九 三 京 東 三 町 保 神 表

終